2020 年模擬国連会議全米大会
第 37 代日本代表団派遣事業報告書

Report on the 37th Japanese Delegation to the National Model United Nations Conference 2020 Project

日本模擬国連

2020 年模擬国連会議全米大会
第 37 代日本代表団派遣事業報告書

目 次

序章

1. 事業規約 5
2. はじめに 9
3. 事業概要 10
4. 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応について 17

第 1 章　派遣団員

5. 派遣団員を終えて
東さくら 18
石井さやか 19
仮谷海人 20
小林翔 21
佐藤寿美 22
藤原杏 23
毒島俊樹 24
宮下恭輔 25
米村綸華 26
6. 渡米プログラムについて
渡米プログラムについて 27
提携校交流 29
派遣団員報告 32
渡米を終えて 38

第 2 章　運営局員

7. 運営報告
運営統括(坂本知陽) 41
副団長(日山実乃里) 43
総務(高橋理都子) 44
渉外(尾島百合子) 45

- 渉外補佐(向後大翔) 46
- 会計(尾島百合子) 47
- 報告会(中村紫英理) 48
- 報告書(日山実乃里) 49
- 情報処理(日山実乃里) 50
- 研究(出来悠果) 51
- 選考プロセス(横山咲希). 52
- 団員育成プログラム(DDP)(水田光) 53
- 英語団員育成プログラム(英語 DDP)(向後大翔) 54
- OBOG(中村紫英理). 55

8. 会計報告. 56
9. 支援団体・個人一覧. 57

大会結果報告

2020 年度模擬国連会議全米大会パナマ大使

日本模擬国連･University of New Heaven 合同チーム

Outstanding Position Paper Awards　2 個

The 2020 National Model United Nations New York Conference

recognizes

Panama
Japan Model United Nations

for its

Position Paper

GA 2

Angela M. Shively
Secretary-General, Week A

NMUN

Lauren Shaw
Deputy SG, Week A

The 2020 National Model United Nations New York Conference

recognizes

Panama
Japan Model United Nations

for its

Position Paper

UNDP

Angela M. Shively
Secretary-General, Week A

NMUN

Lauren Shaw
Deputy SG, Week A

序章

1. 事業規約

模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業

第一章: 総則

第一条(名称) 本団体は、模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業(Japanese Delegation to the National Model United Nations Conference Project)と称し、団体の略称は、「全米団派遣事業」とする。(以下「当事業」とする。)

第二条(目的) 当事業は、模擬国連会議全米大会日本代表団(以下「日本代表団」とする。)として国連における外交を体感する機会を享受した後に、その機会で培った知識や経験を多くの人に伝えることによる、国際問題の社会的認知の促進、模擬国連活動の発展、及び国際社会において活躍する人材の育成を目的とする。

第三条(事業内容) 当事業の活動内容には、以下の事項が含まれる。
一項:前年度事業に関する報告書の作成及び販売
二項:事業報告会の実施
三項:日本代表団団員の選考
四項:団員育成プログラム(Delegates Development Programme: DDP)
五項:以下の各号に掲げる「渡米プログラム」の提供
一号:日本代表団としての模擬国連会議全米大会への参加
二号:国際連合本部及び国際連合日本政府代表部への訪問を通じた国連職員との交流
三号:国際交流プログラムの実施
六項:その他当事業の目的を達成するために必要なあらゆる活動

第四条(公告の方法) 当規約の公告は、当事業ホームページ及び第三条一項に掲げる報告書に掲載して行う。

第二章: 事業運営

第五条(運営機関) 当事業の運営は、模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業運営局(Administrative Office of the Japanese Delegation to the National Model United Nations Conference Project)が行い、略称は、「全米団派遣事業運営局」とする。(以下「当運営局」とする。)

第六条(運営者) 当運営局には属する者は、「運営局員」と称し、前年度事業の日本代表団団員が所属する。

第七条(運営局員の責任) 運営局員は、各々が当運営局を代表し、当運営局のために為した事に関して全員で責任を負う。

第八条(重要問題に関する決定) 当事業を営むに際し、重要問題に関する決定は、運営局員による会合における参加者全員の同意によって行われる。

第九条(重要問題の内容) 重要問題には、当運営局の事業運営コンセプト決定、日本代表団団員選考基準決定、日本代表団団員決定、当規約の改正が含まれる。

第十条(表決手続) 事業方針、その他具体的な事業運営手段等、その他の問題に関する決定は、決定されるべき問題の新たな部類の決定を含めて、運営局員による会合における参加者の過半数の同意によって行われる。

第十一条(役職) 当運営局の役職として、運営統括、団長、副団長、会計担当、報告会担当、報告書担当、情報処理担当、選考プロセス担当、研究担当、総務担当、渉外担当、OBOG 担当、団員育成プログラム(DDP)担当、英語団員育成プログラム(DDP)担当を設ける。

第十二条(運営統括) 運営統括は、運営局全体の活動を指揮監督し、各役職の連携促進や補助、仕事の進捗確認、公式の場における挨拶をはじめとした職務を行う。

第十三条(団長) 団長は、渡米プログラムの責任者として、提携校をはじめとする協力団体との連携を含め、渡米の設計から遂行までの全てを担当して行う。

第十四条(副団長) 副団長は、運営統括•団長の補佐を主に行い、運営統括•団長が不在の場合には代わりに運営局の指揮監督を行う。

第十五条(会計担当) 会計担当は、当事業の収支の管理並びに予算及び決算作成を行う。

第十六条(報告会担当) 報告会担当は、事業報告会の指揮監督を行う。更に、英語会議を除く、その他の全米団主催の企画において中心的な役割を担う。

第十七条(報告書担当) 報告書担当は、事業報告書作成の指揮監督を行う。

第十八条(情報処理担当) 情報処理担当は、インターネット上での広報を行う。

第十九条(選考プロセス担当) 選考プロセス担当は、日本代表団団員選考全体の指揮及び調整を行う。

第二十条(研究担当) 研究担当は、日本代表団団員選考全体の指揮及び調整を補佐し、また、日本代表団団員選考課題の設計・実施に中心的に関わる。

第二一条(総務担当) 総務担当は、運営円滑化のための事務作業一般と、事業報告会および政策発表会の当日統括を行う。

第二二条(渉外担当) 渉外担当は、当事業の助成財団及び協賛企業、後援団体から運営資金の調達をはじめとした渉外活動を行う。

第二三条(渉外補佐担当) 渉外補佐担当は、主に顧問、後援団体の新規獲得や連絡調整等を行い、全米団との関係を強化する役割を担う。

第二四条(OBOG 担当) OBOG 担当は、当事業の目的に資するため、当事業 OBOG との密接且つ包括的なネットワーク作りを行い、OBOG 会の開催に関して指揮監督を行う。

第二五条(DDP 担当) DDP 担当は、団員育成プログラムの指揮監督を行う。

第二六条(英語 DDP 担当) 英語 DDP 担当は、団員の英語運用能力の育成を目的とした、英語団員育成プログラムの指揮監督を行う。

第三章: 会計

第二七条(事業年度) 当事業の事業年度は、6 月 1 日から 5 月 31 日までを一年度とし、当運営局は毎年 6 月に改組する。

第二八条(決算報告) 当事業の決算報告は、第三条一項に掲げる報告書に掲載して行う。

第二九条(事業運営資金) 当事業は、財団からの助成金及び企業等からの協賛金、その他事業運営に伴う収入を経費にあてる。

第三十条(OBOG 基金) 当事業に対して継続的に資金を供給できる母体を確立し、当事業の継続を支援するために、「OBOG 基金」を設立する。

第四章: 顧問

第三十一条(顧問の設置) 当事業は、複数の顧問をおくことができる。

第三十二条(顧問の要件) 当事業の顧問は、以下の役割を担う。
第一項:当運営局の要請に応じた当事業に対する助言を行うこと
第二項:運営統括あるいはその代理の者から定期的に運営報告を受けること
第三項:必要に応じて可能な範囲で当事業の活動に関する協力を行うこと

第五章: 附則

第三十三条(規約の改正) 当規約の改正の必要があるときには、当運営局は遅滞なくこれを改正しなければならない。

第三十四条(改正) 当規約の改正の議決は、運営局員による会合において発議され、会合参加者全員の同意を以て採択され、効力を発することとする。

第三十五条(改正の範囲) 前条で述べる改正の範囲は、一部改正･全面改正を含むが規約の第二条に掲げる当事業の目的と矛盾するような改正は許されない。

第三十六条(規約の発効) 当規約は、平成 18 年 12 月 16 日より効力を有する。

平成 19 年 3 月 7 日改正
平成 21 年 6 月 3 日改正
平成 25 年 4 月 6 日改正
平成 26 年 5 月 24 日改正
令和 元 年 5 月 31 日改正

2. はじめに

模擬国連会議全米大会
第 37 代日本代表団派遣事業運営局

運営統括・団長

坂本知陽

目から鱗が落ちた、と感じる瞬間はどのようなときでしょう。それは、自分がこれまで気がつかなかった事に気がついた瞬間ではないでしょうか。当事業の一員として約 2 年間、様々な問題にぶつかり解決しながら、または仲間と語り合いながら、私たちは常に新しい何かと出会いました。

第 37 代運営局はこの 1 年“Find Your Vision”をコンセプトに掲げ運営を行ってまいりました。“Your”は「第 37 代運営局」と当事業に所属する我々個人の二つを指しています。組織として掲げる Vision を見つけるだけでなく、一人一人が主体的に Vision を追い求め、互いに切磋琢磨することで当事業のさらなる発展だけでなく己も成長しながら活動に励むという決意を込めています。

さて、この 1 年を振り返ると、我々18 名はそれぞれが掲げた Vision をもとに誰かの後ろを歩くだけではなく、それぞれが自らの道を切り開き、歩むことができたと思います。事業活動においては、全米大会の準備期間における提携校の生徒との交流をオンラインツールの活用により例年よりも綿密な打ち合わせと交流を行ったこと、またその結果全米大会では Position Paper 賞をいただくことができました。一方で、個が主張するあまり運営局としての決断が遅れることがあったこと、またこれにより次代に課題を残すという結果を生み出してしまったという点においては失敗したといえます。解決できなかった問題については、失敗を失敗のままで終わらせることなく、課題点を明確にし、次代が十分に検討出来るような地盤を整えました。これを踏まえ、私たちの代での失敗や成しえなかった改革が今後検討を重ね、よりよい事業が築かれていくことを期待します。

さて、我々第 37 代運営局員は、この 1 年の間に多くの壁にぶつかりました。その度に派遣団員期に培った情報収集能力、論理的･批判的思考力等を活用し問題解決に努めました。私たちは学生である一方で、当事業の運営に携わるという半ば社会人のような環境の下、実践を通して多くの学びを得ることが出来ました。これはひとえに助成団体様、企業様、後援団体様、顧問の先生方、また渡米プログラム中に予定しておりましたブリーフィングを快諾していただきました皆様、その他未熟な私たちを支えてくださいました全ての皆様のご支援があってのものです。末筆ながら感謝を申し上げます。

3. 事業概要

(1)模擬国連とは

模擬国連活動とは、一人ひとりが一国の大使になりきり、国際連合(国連)で行われているような会議をシミュレーションするという活動です。会議では、それぞれが自国の政策や外交戦略を立て、国益を守るべく、利害関係の異なる他国と交渉を繰り広げます。この活動は単なるディスカッションとは異なり、政策立案や外交戦略のためのリサーチや会議中のスピーチ、他国との交渉などがあり、実際の行動に即したものとなっています。このような一連の流れを通して、参加者は、情報を取捨選択し、それを効果的に用いる能力やパブリックスピーキング能力、交渉力などを培うことができます。さらに、模擬国連の醍醐味とも言える“外交交渉”の場では、様々な角度から国際問題を考えることの必要性とその難しさを身をもって実感することができます。

模擬国連活動の起源は、1923 年にアメリカ合衆国ハーバード大学で創設された「模擬国際連盟」です。第二次世界大戦後は「国際連合」創設に伴い、模擬国際連盟の後継として模擬国連(Model United Nations)が始められました。その活動は国連のウェブサイトでも紹介されており、世界中の模擬国連をする学生のためのサイトも設置されています。現在では米国や欧州を中心に 20 万人以上の大学生や高校生が、授業や課外活動の一環として模擬国連に参加し、世界約 50 ヶ国で年間 400 以上の模擬国連会議が開かれています。

日本において模擬国連は、1980 年代、欧米の教育機関への留学から帰国した教員や学生により大学や高校の授業に取り入れられるようになりました。その流れを受け、1983 年に上智大学において緒方貞子教授(当時)の顧問の下「模擬国連実行委員会」が発足しました。これを機に日本国内で模擬国連が普及し、現在では全国の学生が主に課外活動として取り組んでいます。また、模擬国連は、模擬国連活動に携わる大学生で構成される全国規模の組織である「日本模擬国連」を中心に、日本中に様々な研究会･支部を有するほか、いくつかの大学や高校では授業として導入している学校もあり、その活動者の数は年々増えています。

(2)模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業とは

模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業とは、毎年春にニューヨークにて開催される全米大会(NMUN: National Model United Nations)へ日本からの代表団を派遣する事業であり、日本模擬国連の事業の一環です。1984 年に初めて代表団が派遣されて以来、今年で 37 年目を迎え、その間日本における模擬国連活動の広がりに寄与してきました。当事業は、渡米するメンバーの選抜から渡

米の準備･実行まで、事業運営の全てを学生が中心となって行っています。

当事業の主眼は、海外の学生との交流です。日頃、日本で様々な国際問題に関心を持って活動している私たち学生にとって、違う国の同じような問題意識を持った学生達と交流するのは貴重な経験となります。毎年北米の大学と提携して合同代表団を派遣しているのも、共同での事前準備や会議内外を通じて行われる交流にひときわ大きな意味を見出しているからです。またその交流では物事に関する日米の考え方、価値観の違いを、身をもって知ることができます。それと同時に、現地で国連職員の方々や国連代表部の方々をお訪ねする機会を頂き、直接お話しを伺うことも、私たちの国際問題に対する認識を深める貴重な機会となることから、やはり当事業の中心的なプログラムの一つとなっています。そして、異文化交流･全米大会･ブリーフィングといったプログラムを通して得られた経験を基に、代表団の学生は日本での模擬国連活動の更なる普及と一層の充実を図っていくと同時に、将来の国際社会に貢献できるような人材になれるよう、努力して参ります。これらが当事業の主な目的です。

(3)模擬国連全米大会とは

模擬国連会議全米大会(National Model United Nations)は、全米学生会議協会(NCCA: National Collegiate Conference Association)という非営利民間団体によって主催される模擬国連会議の大会です。開催場所は、ニューヨークとワシントン D.C.の 2 ヶ所に加え、年ごとに異なる 1 ヶ所の計 3 ヶ所となっており、当事業からは、閉会式が国連総会議場で行われる点に特徴を持つニューヨークでの全米大会に派遣団員が参加しています。これは、イースターの前後の 5 日間、ニューヨークのホテルと国連本部の会議場を使用して開催されます。世界的にも最大規模を誇るこの大会に、アメリカ、カナダ、ドイツ、フランスをはじめとした欧米の国々から、中国や日本、バーレーン、南アフリカなどアジア･アフリカの国々まで、世界中から 300 以上の大学、約 5,000 人の学生がニューヨークの地に集います。そして、それぞれの学生が国連加盟国や非政府組織の代表として、約 20 の国連機関や国際機関の模擬会議に参加し、議論を行います。会議に加えて、イベントも開催されます。大会 2 日目にはプログラムの一環として国連機関や国際機関の専門家による 4 つの講演会が開催されます。これは毎年行われており、毎回ディスカッションなども盛んに行われる人気のイベントです。

全米大会で行われる会議の設定は毎年異なり、それぞれの議題も必ずしも現実世界で実際に設定されているものとは限りませ

ん。議題において注目されている問題を学生が積極的に取り上げ、シミュレートすることが試みられています。また、それぞれの会議は独立しているわけではありません。学生は自身の会議にのみ縛られることはなく、それと関連性を持つ他の会議に出席している代表団と随時進行状況や決議案の内容を確認し合い、政策調整を行うことになります。会議最終日には国連本部の総会議場で、前日までの会議で採択された決議及びレポートが再び審議・投票にかけられます。そして、この総会議場で催される閉会式をもって、5 日間にわたる大会は閉幕となります。

このような大規模な大会を支えているのは層の厚い大会事務局の運営スタッフです。スタッフには全米大会に幾度も参加した方が多く、模擬国連や国際問題に関する知識・経験が豊富です。このような充実した運営スタッフのサポートを受け、大会は高い質を誇っています。

本年度開催予定だったニューヨークでの全米大会は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大の影響により、中止となってしまいました。来年度の大会が無事に開催されることを願っております。

(4)派遣団員紹介

【派遣団員名】
・所属大学 学部 学年
・所属研究会
・担当会議名

【東 さくら】(あずま さくら)
・京都大学 工学部 2 年
・京都研究会
・国際連合総会第 3 委員会(GA3)

【石井 さやか】(いしい さやか)
・東京外国語大学 国際社会学部 2 年
・国立研究会
・国際連合総会第 2 委員会(GA2)

【仮谷 海人】(かりや かいと)
・神戸大学 法学部 2 年
・神戸研究会
・国際連合総会第 1 委員会(GA1)

【小林 翔】(こばやし かける)
・慶應義塾大学 法学部 2 年
・日吉研究会
・国際連合工業開発機関(UNIDO)

【佐藤 寿美】(さとう すみ)
・立命館大学 国際関係学部 2 年
・京都研究会
・国際連合開発計画(UNDP)

【藤原 杏】(ふじはら あん)
・東京外国語大学 国際社会学部 2 年
・国立研究会
・国際連合人口基金(UNFPA)

【毒島 俊樹】(ぶすじま としき)
・東京外国語大学 国際社会学部 2 年
・国立研究会
・核拡散防止条約再検討会議(NPT)

【宮下 恭輔】(みやした きょうすけ)
・東京外国語大学 国際社会学部 2 年
・国立研究会
・国際連合環境総会(UNEA)

【米村 綸華】(よねむら りんか)
・京都大学 法学部 2 年
・京都研究会
・持続可能な開発に関するハイレベル政治フォーラム(HLPF)

(5)運営局員紹介

【運営局員名】
・所属大学 学部 学年
・所属研究会
・担当役職名

【尾島 百合子】(おじま ゆりこ)
・関西学院大学　国際学部　3 年
・神戸研究会
・渉外･会計

【向後 大翔】(こうご ひろと)
・国際基督教大学　教養学部　3 年
・国立研究会
・渉外補佐･英語団員育成プログラム(英語 DDP)

【坂本 知陽】(さかもと ちはる)
・同志社大学　経済学部　3 年
・京都研究会
・団長･運営統括

【高橋 理都子】(たかはし りつこ)
・津田塾大学　学芸学部　3 年
・国立研究会
・総務

【出来 悠果】(でき ゆうか)
・一橋大学　法学部　3 年
・国立研究会
・研究

【中村 紫英理】(なかむら しえり)
・青山学院大学　経営学部　3 年
・日吉研究会
・報告会･OBOG

【日山 実乃里】(ひやま みのり)
・大阪大学　法学部　3 年
・神戸研究会
・副団長･報告書･情報処理

【水田 光】(みずた ひかる)
・東京大学　法学部　3 年
・駒場研究会
・団員育成プログラム(DDP)

【横山 咲希】(よこやま さき)
・上智大学　法学部　3 年
・四ツ谷研究会
・選考プロセス

(6) 会議の流れ

1. 議題順序選択

全米大会では、それぞれの会議にあらかじめ 3 つの議題が設定されています。会議が始まると、本格的な議論に入る前に、話し合う議題の優先順位を決定します。3 つの議題が全て話し合われることも可能性としてはありますが、会議期間が実質 4 日間に限られる中で、全ての議題に関して国際社会が結論を出すのは容易なことではないため、基本的に 1 番目として採択された議題に会議時間のほとんどが使われます。

2. 会議

模擬国連は、実際の国連における会議を「模擬(Simulate)」する活動です。国連において様々な機関があるのと同様に、模擬国連においても様々な機関・会議が設定されます。各会議において、大使となった学生は、自国や世界の利益になるような決議を作るために議場を動き回ります。最終的に模擬国連の会議は成果文書を出すことが目標とされています。大使の会議での行動に関しては会議ごとに特徴がありますが、一般的には以下の通りです。

まず初めに、自国の政策やスタンスを公式発言(Speech)などで他国に提示します。それらを用いた交渉を通じて、ある問題に対して同様の意見・立場を持っている大使を探し出します。この際、集まったグループはワーキンググループ(WG: Working Group)と呼ばれる。例えば、アフリカ、EU など共通政策を標榜するいわゆる「地域グループ」で集まることもあります。

ワーキンググループごとにまとまると、次に決議案(DR: Draft Resolution)[1]、設定会議の性質によっては報告書(Report)の作成に入ります。ワーキンググループの中において決議文作成のまとめ役を担う者を Pen Holder / Master と呼んでいる。

「決議案」が会議によって可決･採択されて「決議」になります。集まったワーキンググループ内で、意見を出し合いながら具体的な決議案の文言を作成していくのですが、自国の主張や意見が必ずしもワーキンググループのすべての大使と合致するわけではありません。それにも関わらず大使がワーキンググループを形成するのには、以下のような理由があります。

まず、作成し終わった決議案を会議で公式に配布するには会議監督(Director)と議長(Chair)のサインが必要とされます。会議監督･議長を総称してダイアス(Dias)[2]と呼ばれます。決議案をダイアスに提出するためにはそれに対する支持国(Sponsors) と署名国(Signatories)を一定数集めなければなりません。これは、提出される決議案にあらかじめ一定数の大使の賛成を求め、決議案の乱発を防ぐためであり、その必要数はダイアスから会議が始まる時に提示されます。従って決議案は、ワーキンググループで作成する必要があるのです。

また、より多くの国の賛同のもとで作成された文章は、他の国と交渉･説得するため

[1] 決議案: 決議の草案のこと。

[2] 日本の模擬国連ではフロントと呼ばれています。

にも有効であり、複数の国である程度意見がまとまっているものであるため、会議全体の円滑な議論の進行にも寄与します。

さらに、提出された決議案が会議で採択され決議になるにはワーキンググループ内だけの賛成では不十分であるため、決議を作成する際には、自分たちの国の利益ばかりを追求するのではなく、国際社会における貢献度となる国際益も重要とされます。

決議提出後は、投票でそれを決議にするため、最終の外交努力が行われます。つまり、他のワーキンググループによって提出された決議案の内容と自分たちの決議案の内容が相反するものならば、その部分の変更を要求し、そうでなければ意見調整をした上で、それらの決議案の 1 つにまとめる Merge という作業にはいります[3]。さらに、より多くの国の支持を得るために、必要ならば自分たちの決議案に修正を加えられた新たな決議案はアメンドメント(AM: Amendment)と呼ばれます。この際、注意しなければならないのは決議案で支持国に入っていた国が AM でも支持国に入ることが大事であるということです。決議案での支持国が一国も漏れずに入っている AM は Friendly Amendment と呼ばれます。一方で、そうでない AM、つまり決議案での支持国が一国でも欠けた AM は Unfriendly Amendment と呼ばれます。これらの一連のプロセスで、自分たちの決議案が過半数の賛成を得られるように交渉を続けます。

[3] 日本の模擬国連では、複数の決議案をまとめる作業を「コンバイン」と呼びます。

3. 投票行動

提出された決議案は、全体に配布され、投票にかけられます。決議案が決議として採択されるためには、出席者の過半数の賛成を必要とします、投票方法はいくつかあり、具体的には、全会一致(コンセンサス)、無記録投票、記録投票、分割投票があります。コンセンサスは、決議案に断固反対する大使がいるかを尋ねます。つまりコンセンサスで採択されれば、全参加者がある程度その決議案を認めていることになり、国際社会の総意を形成するという意味においては全会一致が持つ意味は大きいと言えます。無記録投票、記録投票は一国ずつ意思を示していく方法です。最後に、分割投票とは、投票される決議案の一部に文章・単語などに関して不満がある場合、決議案からその部分だけ削除した形で投票することです、これは国益を守るために、積極的に用いられます。

4. 会議終了

すべての決議案に対する投票が終了し、大使から会期の延長を求める動議(Motion)が提案・可決されると、会議は終了となります。

4. 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応について

本報告書をご覧の皆様

平素より当事業へのご理解･ご支援を賜り、誠にありがとうございます。

当事業運営局では新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的な感染拡大に伴い、以下の対応を行いましたので、ここにご報告いたします。

1. 全体団員育成プログラム(DDP: Delegates Development Programme)④

全体 DDP④は 2020 年 3 月 15、16 日に東京にて実施予定でしたが、Skype を利用し、オンラインで実施いたしました。

2. 渡米プログラム

2020 年 3 月 17 日から 4 月 4 日に実施を予定しておりました渡米プログラムは、中止といたしました。なお、派遣団員が参加を予定していた 2020 年模擬国連会議全米大会(NMUN 2020: National Model United Nations 2020)も開催が見送りとなりました。

3. 事業報告会

2020 年 6 月上旬に関東･関西の両地域で開催を予定していた事業報告会は中止といたしました。その代替プログラムとして、1 年間の事業成果をまとめた動画を作成した他、DDP で行うようなグループディスカッションを体験し、また派遣団員･運営局員に直接質問のできるオンライン体験会を実施いたしました。

感染症の世界的流行という抗えない事情ではございますが、予定していたすべてのプログラムが実施できなかったこと、大変心残りです。日頃よりお世話になっております皆様には残念なご報告となってしまい、誠に申し訳ございません。引き続き当事業への温かなご理解･ご支援をいただけますと幸いです。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

模擬国連会議全米大会第 37 代日本代表団派遣事業

運営局員　一同

第 1 章

派遣団員

（2020 年 2 月に実施した政策発表会にて。第 37 代派遣団員の東は体調不良のため欠席。）

5. 派遣団員を終えて

東さくら

派遣団員に選出されてからの半年間、全体 DDP や地域 DDP を通して、英語力、論理的思考力、スピーチ力、交渉力を中心に鍛え身につけてきた。さらに、全米大会本番に向けて、自分が参加予定だった会議の議題についてのリサーチを進め、その議題に対する政策を作り上げるという一連の過程を通して、数えきれない知識を会得し、自分の力を伸ばすことができた。これらの派遣団員としての活動を終え、特に成長したと感じることが 2 点ある。

1 つ目は､収集したたくさんの情報を整理して分析する力を身につけられたということだ。全米大会本番に向けて政策を練る際には、まず始めに、議題について調べる。その議題に関連してどのような問題が今世界で起こっているのか、その問題の背景や原因は何か、などたくさんのリサーチをして議題についての理解を深める。これらの膨大な情報を自分で整理し分析することによって、その議題や問題の構造を明確化し、政策つまりアプローチ方法を組み立てていかなければいけない。さらに、政策を現実的なものにするため、世界の国々や組織が実際に行っている政策も調べる必要がある。この一連の取り組みを通して、できるだけ多くの正確な情報を集めそれらを整理して分析し、一つの自分の主張を具体的に組み立てる力を培うことができた。DDP では、運営局員や OBOG の方々に情報の分析方法に関する指導を受けとても勉強になった。今までにも、中学校や高校の授業などで一つの問題に対する解決法を考える機会は設けられていたが、多くの情報に基づいて具体的で現実的なものを考えることはできていなかった。当事業での活動を通して、この力を養うことができたと思う。

2 つ目は、高い志を持った優秀な仲間と DDP で直接接することで、英語学習に対する高いモチベーションが得られたということだ。私自身、英語学習では英語をツールとして発信･受信する力を重視してきたが、自分が思っていることを流暢に英語で表現する力はいまだ不足している。大学入学後は英語を聞いたり話したりする機会が減り、中学校時代や高校時代に比べて自分の英語運用能力を磨く時間がとても少なくなった。そのような中で、当事業の DDP は、英語力を鍛える課題に他の派遣団員と共に取り組む機会を与えてくれた。仲間がとても流暢に英語を話す姿や、自分の意見を上手く英語で表現して交渉する姿などを目の当たりにし、自分ももっと努力しなければならない、と思えた。これをきっかけに、今は日常的に英語に触れるようにしている。

派遣団員期が終わり次は運営局員として当事業の運営に携わることになるが、派遣団員期で身につけた力を発揮し、さらに充実した組織を目指して、半年間切磋琢磨してきた仲間たちと共に頑張りたいと思う。

石井さやか

当事業の派遣団員として選出されてから今まで、長期間に渡るリサーチ力やパブリックスピーキング力の強化など、さまざまなことを経験できた。派遣団員期の経験を通して特に自分が成長したと思うことが 2 つある。

1 つ目は、物事を論理的かつ多面的に考える力である。以前は、大学での課題に取り組む際や模擬国連でのリサーチをする際に、自分の意見とその根拠にどのような論理的な繋がりがあるのか、またはその考え方に抜け漏れがないかといった点に注意を払うことがあまりできていなかった。しかし、当事業の DDP に参加し、グループディスカッションの練習や運営局員による自分のリサーチへのフィードバックを通して、物事を多面的かつ漏れなく見ることや、意見と根拠の論理性など、自分に不足していたことが何なのかを明確にすることができた。DDP におけるさまざまなコンテンツを通して、運営局員や他の派遣団員の優れた点、自分に不足していた点を学び取ることができたのは、自分にとって大きな刺激となった。

2 つ目は、自分の仕事に対する責任感である。これまで学校や部活などで代表を務めた経験が無かったため、自分の仕事が全体の成功に大きくかかわる経験は初めてだった。当事業では全米大会に向けたリサーチやポジションペーパーの執筆、政策発表会に向けた準備、また、派遣団員間での話し合いなど、自分の仕事が事業全体に大きな影響を与える課題をこなしていかなければならない。今まで「自分がその仕事を行わなくても、他の誰かがしてくれる」という立場にいた自分にとってこのように自分の行動が周囲に大きな影響を与えるという状況に置かれたことは大きなプレッシャーであった。しかしその一方で当事業の一員としての自覚を強める契機となった。また、当事業への参加を通して、学生が主体となって運営し、9 人という決して多くない派遣団員のうちの一人である自分の行動が他のメンバーに与えうる影響の大きさに気が付くことができ、自分の仕事に対する向き合い方を考え直す良い機会となった。派遣団員期を通して、組織の一員として、仕事を人任せにしたり、人の意見にただ納得したりするだけではなく、自分の意見や疑問点を以前より積極的に伝える姿勢が身についた。

当事業への参加を通して、自分の長所や短所を見つめ直す機会や、自分を刺激してくれる派遣団員や運営局員との出会い、そして DDP や政策発表会などの様々な経験を得ることができた。これらの経験は、それまで事業に主体的に参加したことのなかった私の視野を変える機会となった。これからは、運営局員として次期派遣団員がこのような貴重な経験を積むサポートをしていく立場となり、一人一人の仕事やそれに対する責任はより重くなると思う。約 1 年間の運営局員期にはつらいことや大変なことも多いと思うが、派遣団員期に培った人前に立つときの態度や物事の見方や仕事への責任感を活かして、当事業の運営に携わっていきたい。

仮谷海人

約半年にわたる派遣団員期を振り返ると、当事業への参加自体や DDP を通した自分自身の変化に驚かされる。

DDP を通して得たことはたくさんある。綿密に考えこまれた様々なコンテンツを通して、論理的思考力、交渉力、グループディスカッションの方法、プレゼンの作り方や方法、問題分析や政策立案の方法などさまざまなものを学んだ。どれも強制されるものではなく個人個人が自分自身に合った形で習得できるような工夫がされており、DDP に参加する度に学ぶことが必ずあった。

しかし、DDP を通して得たものはこれらの表面的な能力だけではない。これらのコンテンツはたいてい一人ではこなせず、他者との協力や協議、時に意見のぶつけ合いが必要となる。その中で他者の意見を正確に深く理解することができるようになった。その人はなぜその主張をするのか、相手にはどのような思惑があるのか、といったことを自然と汲み取れるようになり、関心を持つようになった。この他者への理解力は、他者とのあらゆるコミュニケーションで役に立つものであり、DDP を通して得た大きな力であるといえる。

実際、この理解力を得たことは自分自身が当事業に入って変わったことであるとも感じている。当事業に入る前は、あまり他者への関心を持っておらず、討論や交渉などでもある種形式的な他者の主張の理解にとどまっていた。しかし、当事業でこの力を身に着けてからは、他者に対して以前より関心を持つようになり、他者の意見に共感できるようになった。強い共感力を得たということは、以前の自分から考えると大きな成長である。他者の意見に共感することは、例えば議場で協力できる味方を増やすことにもつながったり、他人の視点から物事を見ることができるようになったり、相手を説得する際にも一度共感することでより容易になったり、ととても役に立つ能力だと思う。当事業に参加し、他者へより強く共感できるようになったことで、自分自身の視野が広がったといえる。

このように自分自身にもたくさんの変化や成長をもたらしてくれた派遣団員期が終わり、運営局員期が始まる。しかし、だからといって成長が止まるわけではなく、逆により成長するのではないかと思う。運営局員期では、新しい派遣団員に対して自信をもって指導やアドバイスをする機会が増えるし、責任も派遣団員期に比べて格段に重くなる。現時点では、完璧にこなせる自信はまだないが、今まで私たちがお世話になってきたような、自分自身の思い描く自信を持った、頼れる運営局員像に近づくための努力は惜しまないつもりである。次期派遣団員とともに成長しながら、当事業をより良い事業にしていき、持続させていけるように努力していきたいと思う。

小林翔

当事業の派遣団員期における私の成長は私の想像を超えるものであった。当初は、政策立案能力、特に問題分析能力の向上を派遣団員期の主な目標として掲げた。私は国際公務員を志しているため、私にとって政策立案能力の体得は必須である。加えて、これまで政策立案過程を強く意識したことが無く、理由付けが不十分なまま政策を立案してしまうことがあった。具体的には、私は高校時代に「高レベルの放射性廃棄物の処理」等の議題に関する政策を模擬国連会議で提案したが、是正すべき問題の比較検討を十分にせず、自分の前知識のみを基にして政策を立案してしまった。実際、前述の会議において、過去に視聴した未来世代保護に関するドキュメンタリーから得た知識を基に、処理方法等の検討を十分に考慮せず、核廃棄物の存在を未来世代に伝える方法の研究を優先課題として提案してしまった。

しかし、派遣団員期では、問題分析に力点を置く習慣を身に付けることが出来た。DDP では、運営局員から、着目するアクターの選定についての理由付け等に対する指摘を受け、それを基に自分の政策に適宜修正を加えた。これにより、理由付けを比較的強く意識するようになり、「筋が通った」政策を立案出来るようになった。さらに、予想外の収穫もあった。それはプレゼンテーション能力の向上である。私は米国の高校出身の為、高校時代にプレゼンテーションをする機会が多々あったが、教員から改善点等を指摘される機会は設けられていなかった。だが、当事業ではプレゼンテーションを改善する機会に恵まれた。DDP では運営局員からボディーランゲージや聴衆にとってより「見やすい」スライドの作成方法等に関する指導を受け、改善に取り組んだ。この結果、聴衆にメッセージが伝わりやすいプレゼンテーションを作成出来るようになった。

以上のように、派遣団員期は政策立案能力向上、プレゼンテーション能力向上という二つの大きな収穫があった。今後は模擬国連会議や将来のキャリアにおいてこれらを最大限生かせるよう努力していきたい。

間もなく運営局員期に突入するわけであるが、運営局員期は私にとって当事業参加の第二の目標を達成する絶好の機会である。第二の目標とはリーダーシップスキルの体得である。私にはこれまで、特定の団体や企画等の長を務めた経験は無い。また、国際公務員を志している者として、リーダーシップスキルは必須である。以上を踏まえ、私は運営局員期にリーダーシップスキル体得を目指す。

私にとってリーダーとは、仲間の「声」を汲み取ってそれらを決定に反映し、特定の状況等に応じて迅速で適切な判断を下す能力を有する存在である。私は第 38 代運営局にて特定の業務の統括を務めるため、業務遂行において他運営局員と協力しつつ、上記の存在となり、当事業参加の第二の目標を達成出来るよう、最大限努めていく所存である。

佐藤寿美

私は、当事業の派遣団員に選出されてからとても充実した日々を過ごしていた。今改めて思い返してみると、色々な偶然が重なっていたように思う。

私は元々国連職員を志していたため、何となく当事業に興味を持っていた。しかし、実際アプライしてからの選考期間は大変なものだった。学校の課題が忙しく、途中で辞退を考えたことも正直あった。その時期に幸か不幸か足の靭帯を切ってしまい、どこにも動けず数週間は実家にいなければならなかった。外出できない分選考課題に取り組むことができた一方、政策立案コンテンツ[4]という選考の一大イベントに出られないことが確定してしまった。派遣団員に選ばれた時は、まさか選ばれると思っていなかったので、とても嬉しかった。

他派遣団員とは、政策発表会プレゼンの練習を夜遅くまでする等して、困難を一緒に乗り越えたということもあり、今思っても、本当にいい仲間になれたと思う。どの派遣団員も本当に真面目で仕事が早いし尊敬できる人たちばかり。そんな中に私も入ることができてたくさん学ぶこともあったし、成長したいと思った。当事業に入って特に以前と変わったと思うことは、論理的に物事を考えられるようになったことである。普段から人前でも急に話を振られるとうまく話せず自分でも何を話しているかよくわからない時が多々あり、直したいとずっと思っていた。普段の会議や大会では自分の考えはあるが発言力が伴わず、成果を残せたことはなかった。しかし、派遣団員と DDP や色々な場面で議論を行う際に、論理的思考力の高さや発言力等に刺激を受けて私も見習おうと思った。今でも、他の派遣団員ほどではないが、このメンバーでたくさん発言することで他の会議等に発揮できるように努力していきたいと思う。

DDP では、最初はグループディスカッションの仕方もよく分からず、うまく進められなかったが議論の前提や判断軸を決めて行うことで、論理的に議論を進めることができた。交渉コンテンツでは、どの程度相手に情報を提示して譲歩するのか判断するのが難しかったがとても勉強になった。全体で交渉コンテンツを行う際は、二者間交渉や全体交渉など交渉の場ごとに話す順序を考えて議論を進めることの大切さを学んだ。運局員期には、派遣団員期に運営局員が、私たちにしてくださったようにこれから後輩を育てていくことに不安もあるが、他の派遣団員と協力して最後まで成し遂げたいと思う。同時に派遣団員期とは違った運営能力も養っていきたいと思う。これから運営の立場で大変なこともあると思うが、第 38 代運営局員の一員として尽力していきたい。

[4] 台風 19 号の接近により中止となりました。

藤原杏

当事業に参加して一番変わったことはものの見方だ。一つの問題を扱うとき、意識して様々な観点から評価し、調べるようになった。それまでは漠然とした大きな問題についてどうすればいいか分からず、リサーチに対し苦手意識を持っていた。手順を追って調べていく力がついた。また、グループディスカッション･プレゼンテーションといったDDPのコンテンツや、運営局員の方からフィードバックを頂く際の説明を通して、論理的に分かりやすく話そうとする癖がついた。自分で何度も説明したり、上手い人の話し方を見たりする機会を頂いたことで、相手に伝わりやすい話し方について学ぶことができた。

DDPを通じて、運営局員の方々にフィードバックを頂く機会が多く、リサーチや問題に取り組む手法を学んだ。またグループディスカッション、交渉コンテンツ、プレゼンテーションなど多岐に渡るコンテンツによって、自分の力を図り、伸ばすことができた。交渉コンテンツでは、利害の一致しない相手と合意がとれるかたちで結論を出すための流れの作り方、時間の使い方を勉強した。それまであまり積極的な交渉をした経験がなく、自身の交渉力に漠然とした不安を抱いていたため、このコンテンツを通じて自身の問題を具体的に理解できたこともよかった。プレゼンテーションも完全な初心者だったが、練習･本番･フィードバックを繰り返すうちに自分の癖を掴むことができた。分かりやすいプレゼンテーションのコツやボディランゲージといった技術も教えていただいた。個人英語DDPでは英語を話すことに慣れる機会が多く提供された。指導する運営局員の方からのフィードバックが参考になり、英語で分かりやすく論理的に話す方法が身についた。個人DDPでは繰り返し相談に乗ってもらいながら全米大会に向けた準備を進めた。誰かに一対一でサポートしてもらえるのは貴重な経験だった。細かい部分まで質問して詰めることができ、長期的に自分を見ている人から足りない部分や弱点を指摘していただけるといった全体 DDP だけでは難しい部分を補っていただいた。

運営局員になるにあたって、自分が受け取ったバトンの重さを忘れることなく、責任を持って誠実に運営に取り組みたいと思っている。同時に当事業をさらによくしていけるよう、常に客観的な視点を持って改善すべき点を見つめ、柔軟に対応していけるよう心がける。また運営局員の方々には、約半年の派遣団員期の間に数えきれないほど教えていただき、助けていただいた。運営局員として新しい派遣団員を迎えた暁には、そのニーズに合わせたコンテンツを提供し、派遣団員期が悔いのないものになるよう自分がしていただいた分まで全力でサポートしたい。約一年にわたる運営では大変なことも多いだろうが、運営局員同士で連携し、自分のやるべきことを見極め、受け継いだ事業をしっかりと次の代に繋げていこうと思う。

毒島俊樹

派遣団員としての活動は約 7 か月ほどであったが、それでも私に非常に多くの経験をもたらしてくれるものであった。そして、これらの経験から私は様々な点において成長することができた。

まず初めに挙げられるのが、思考力である。私は当事業に参加するまで、政策というものをしっかりと一から考えたことはなかった。過去に当事業主催の英語会議に参加した際に政策を作ったのだが、それはとても政策と言えるようなものではなく、今考えてみると会議にその政策を持って行ったことすら恥ずかしく思えるようなものであった。しかし、全米大会に向けて政策を作るという経験をすることによって、物事をただ学んで受け入れるだけではなく、学んだり調べたりしたものを体系化したうえで自分の頭でそれを発展させるという考え方を身に付けることができたと思う。また、私は今まで様々な政策を見てもただそれを受け入れるだけで深く考えることはあまりしてこなかったのだが、様々な問題について深く考えながら政策を作ったことによって、実際に打ち出された政策の意図などを考えるようになった。加えて、当事業に参加してから 4~5 か月間一つの問題について取り組み続けてきたことによって、長期間一つの物事について思考し続ける力が身についたと思う。一つの問題について考えることが日常となり、常に頭のどこかにその問題が存在している中で生活を送ることができた。その結果、一つの問題に取り組み続ける力を身に付けることができたと思うし、さらにはその楽しさも感じられるようになった。

また、DDP によってもたくさんの学びを得ることができ、将来役に立つと考えられる能力も身に付けることができた。特に伸ばすことができたとのは、ディスカッション能力とファシリテート能力である。DDP では多くのコンテンツを通して様々なことを学ぶことができたが、その中でも数多く行ったグループディスカッションの経験を通して、ディスカッションの効率的な進め方や、ファシリテーターとしての良い立ち回り方を学び、身に付けることができた。これは模擬国連だけではなく、これから経験することになる就職活動や、その後の社会人生活でも必要になるスキルであると思う。

当事業の派遣団員期を通して私は様々な力を身に付けることができたし、精神的にも成長することができた。これから私たち派遣団員は、運営局員として一年間当事業を運営することになる。私たちは新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響から全米大会には参加することができず、例年の運営局員よりも派遣団員期に得た経験は少なくなっていると思う。しかし、自分が経験したような「成長したという感覚」を次期派遣団員たちにも経験してもらいたいと思っている。私たちの少ない経験を埋めあわせるために、派遣団員期に培った「思考力」を活かしたいと思っている。また、その中で自分自身もさらに成長させたいと思っている。

宮下恭輔

当事業の派遣団員に選出されてからの半年間を通して、私自身と私の周りが大きく変化した。派遣団員期の主要な活動が全米大会に向けたリサーチ、PP: Position Paper の執筆やスピーチ練習等の大会準備であるが、自身が全米大会で扱う議題に対して 4 か月にわたって真摯に向き合ったことは、私にとって非常に貴重な経験であった。ひとつの議題について問題の構造分析を行い、問題点を洗い出して原因を探り、それに対する政策を立案するという経験の中で、問題を体系的に把握し、その解決策を見出す能力が養われた。全米大会に向けた準備を通して得られたこうした能力に加えて、DDP では論理的思考力やディスカッションの能力を培うことができた。DDP では各回形式や内容を変えながらディスカッションが行われたが、ここにおいては上手く時間を使いながら効率的に議論を進める能力、自身の主張を支えたり他人の主張を批判したりするための論理的思考力が必要とされた。各回の DDP を通じて養ったそれらの能力と前述した物事を体系的に捉える能力は、当事業の活動に留まらず、模擬国連の活動全般においても会議準備や研究会の運営で大いに役立っている。

また、派遣団員期を通じて変化したのが自身の英語運用能力である。前述したように派遣団員期の主要な活動は全米大会に向けた準備であり、当然のことながら、これに際しては日本語のみならず英語の運用能力が必要とされた。全米大会に向けて 4 か月にわたって準備をする中で、英語文献を参照しながらリサーチを進めたり、提携校のペアと週 1 回のペースで議題に関する情報共有や会議戦略を立てたり、PP を執筆したりと、日常的に英語に触れることで、英語を運用する能力が向上したように思う。これに加えて、英語 DDP を通じて英語でのプレゼンテーション能力や自分の言いたいことを英語で確実かつ端的に伝える能力を養うことができた。今は英語ができて当然の時代であるが、留学経験がなく学校での学習と趣味程度にしか英語に触れてこなかった私にとって、全米大会への準備を通じて日常的に英語を運用できるようになったことは大きな変化であった。

冒頭でも述べたように、派遣団員としての半年間は私に大きな変化をもたらした。ここまで述べてきたような能力面の変化に加えて、派遣団員として日本国内の大学教授や国連職員の方とお会いして直接お話をするという機会を通じて自身の視野が広がったことも変化のひとつである。今回、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で全米大会が中止されたことは非常に残念であったが、それまでの準備過程で得られた能力や視野の広がりは今後の当事業の運営、ひいては自身の人生において大いに生かされるものであると確信している。

米村綸華

昨年の 10 月末に派遣団員が発表され、それから約 7 ヶ月間当事業の一員として過ごしてきた。もし当事業に参加していなかったら私の「大学生活の捉え方」は全く別のものになっていただろうと振り返って思う。当事業がなければ、アルバイトや友達との交流を楽しみつつ、大学で単位取得に尽力するような生活になっていただろう。これでも、自分でお金を稼ぐ苦労を知り、広がった行動範囲を謳歌し、今まで触れることのなかった専門性に魅了され充実した日々になっていたと思う。しかし、その生活に当事業という要素が加わり、「社会の互助的構造」に触れることができたと感じている。というのも、当事業を運営するには、その主体および運営を引き継ごうとする後継者としての私たち学生の存在は言うまでもなく必要である。しかし、それだけで十分ではなく、私たちを支えてくださる顧問の先生方や後援してくださっている企業、OBOG の方々、提携校等の存在があって初めて組織は機能し、事業を全うできる。自分一人では何もできず、大勢の人の支えがあって興味分野の追求ができる、そのありがたみを改めて感じた。当事業の活動以外でも、普段の生活の中で自分が営む活動全ての背景にはそれを提供してくれる存在がいる。「大学生活」が「社会の互助的構造」の一部であることに気づき、より客観的に生活を捉え直すことができたのは当事業のおかげであると感じている。

また、その他にも社会に出た時に活かせるスキルを派遣団員期の DDP で習得することができた。具体的には、問題分析能力や、政策立案および政策評価の仕方、グループディスカッションのコツ、パブリックスピーキング能力などである。特に印象に残っているのは「もれなく、ダブりなく」物事を分析する能力である。初回の DDP でこの能力についてのレクチャーがあったが、どのように全米大会への準備に活かせるのかがわからなかった。しかし、議題のリサーチ時に意識することで、問題分析の要領を掴み、優先議題の全体像の深い理解につながったと思う。この能力をはじめ、派遣団員期の DDP で体得した能力やその活用方法を忘れずに、これからの生活にもぜひ活かしていきたい。

さて、これから一年間、私たちが運営をしていく番となる。これまで、運営局員の方々にはとてもお世話になった。単なるノウハウの伝授にとどまらず、議題理解や政策立案について一緒に頭を悩ませてくださったこともあった。今年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により全米大会に参加できなかったことから、次の派遣団員に何を伝えられるのか、何を教えられるのか、少し不安な部分もある。しかし、異例の代であるからこそ 9 人で一丸となり、「私たちにできること」が何かを考え、37 年間続いてきている当事業の発展に努めてまいりたい。

6. 渡米プログラムについて

当事業では、毎年 3 月中旬から 4 月上旬に約 3 週間の渡米プログラムを実施します。渡米プログラムは、①提携校との交流 ②ブリーフィング ③全米大会への参加 という 3 つのプログラムから構成されています。毎年全米大会の日程が変わるため、その日程に合わせて提携校との交流、ブリーフィングの日程を決定します。3 つのプログラムについて簡単にご説明します。

① 提携校との交流

毎年、アメリカの大学と提携して合同代表団を派遣しています。共同での事前準備や会議内外を通じて行われる異文化交流を目的としています。一週間ほど提携校に滞在し、その間に全米大会で提案する政策の調整や文化交流を行います。日本にいる間も勿論オンラインツールを使って政策調整を行いますが、対面で行うことで全米大会に向けたモチベーションの増加、政策自体の質の向上につながり非常に有益なものとなっています。また、提携校の学生に現地の名勝地に連れて行ってもらったり、派遣団員が日本文化パーティーを行ったりもします。

② ブリーフィング

当事業は、現地で国連職員の方々や国連日本政府代表部の方々をお尋ねするブリーフィングという機会を設けています。国際社会の第一線で活躍されている方から直接お話を伺うことも、私たちの国際問題に対する認識を深める貴重な経験となることから、当事業の中心的なプログラムのひとつとなっています。全米団の OBOG の方々にもブリーフィングをお願いすることもあり、当事業の縦の繋がりを強く感じます。また、派遣団員には、将来国連で働きたい、国際社会で働きたいという夢を持った者が多くいます。そのような者にとっては、ブリーフィングを提供してくださる方々はまさにロールモデルとなります。このブリーフィングを通して、派遣団員は、将来国際社会で活躍するための具体的且つ現実的なアドバイスを頂き、将来に対する新たな視点を見つけることが出来ます。

③ 全米大会

約 5000 人もの参加者が集う世界最大規模の全米大会では、派遣団員に多くの成長

の機会が与えられます。アメリカをはじめ、世界各国から集まった優秀な出場者から、議論の仕方、良質なパブリックスピーキングの実演、初対面の人とも旧知の仲の様になれるコミュニケーションの仕方を学び、国連外交の縮図を経験することによって多くを吸収します。また、団員育成プログラムにより培った能力を毎年十分に発揮し、その議論に参加し、時にリードします。さらに、全米大会に参加することによって、大会での経験のほかにも得られる物があります。それは、違う国の同じような問題意識を持った学生たちとの交流です。日頃、日本においてさまざまな国際問題などに関心を持って活動している私たち学生にとって、このような機会は大変貴重な経験です。

本年度は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染症の感染拡大の影響を受けて、渡米プログラムの実施を中止しました。今、本報告書を手にとってくださっている中には当事業への応募を考えている方もいらっしゃると思います。昨年度(第 36 代派遣事業)のものとなってしまいますが、昨年度の渡米報告をご紹介いたします。提携校交流、代表団員報告(全米大会についての報告)、そして渡米を終えての報告を一部抜粋して掲載いたします。 (ブリーフィングの詳細は、都合により割愛いたします。ご了承ください)

提携校交流

～NMUN 準備～

トレーニングセッションは、NMUN に向けて提携校滞在中と大会前日の 2 度にわたり実施された。提携校滞在中は、TCU (Texas Christian University)の教授から会議全体の流れ、決議文の書き方、会議行動に関する講習を受けた。その後、“Implementation and Assessment of the Sustainable Development Goals”という議題のもと、NMUN のシミュレーションを行った。派遣団員はペアの学生と共に議論に参加し、効果的なスピーチをする練習や決議文を執筆する練習を行った。大会前日は、会議全体の流れの再確認に加え、ペアと共に会議戦略を考えた。提携校の学生との交流が深まったとともに、ペアとの信頼関係も深まり、NMUN への士気が高まる有意義なトレーニングセッションとなった。

↑全米大会のシミュレーションを行なっている様子①(ペア間での調整や議論)

私とペア Lydia はトレーニングセッションでは、調べた情報の共有、各議題のオランダ大使としてのスタンスの確認、全参加国の Position Paper の確認、議題順序選択の交渉を含む実質的な会議戦略の打ち合わせを行った。議題順序選択の交渉については、あらかじめ文書上で自分の意見を共有し Lydia から同意を得ていた。しかし、他国の Position Paper を読み自国の状態を顧みると、考え直す必要性があるのではないかと思い相談した。すると彼女も同様の意見を持っていたため、再度スタンス構築を行った。他にも彼女と当日のスピーチの割り振りやコンタクトの取り方を決め、あらかじめ作ったスピーチを自然な英語に直してもらった。また、日本ではペアとの情報共有や意見交換は文書だったことから NMUN 以外のことについても話すなど、コミュニケーションを積極的にとった。

私の NMUN への不安の一つにペアとの意思疎通があった。なぜなら、ペアと会うまでコミュニケーションは Messenger、資料や意見の共有は Google docs 上と文面上のやり取りのみで、お互いの性格がわからず、NMUN までに信頼関係を築けるのか未知数だったからである。しかし、実際に会って NMUN の準備に取り掛かると、すぐにうち解けた。どちらもおしゃべりなのだが、私は心配性、Lydia は楽観的で臨機応変に動くという相反する性格だった。そのため、議題順序選択のスタンス構築の際、私は、自

国のスタンスの議題が優先議題にならなかったらどうしようかと不安になっていたが、彼女は「その時は case-by-case に対応しよう！」と非常に前向きだった。準備の中で話すうちに、私の不安は彼女が全て吹き飛ばしてくれ、お互いの理解が深まった。NMUN 本番では、この性格の違いの理解がお互いの足りない要素を補完した。これは、トレーニングセッションを通してお互いを理解していたからこそできたのだと思う。私は、協衝するうえでその相手と自分との違いを把握し、自分が持っている能力で相手をどうサポートできるのか考え、それを行動に移すことが、相手と親密になること以上に大切だと思った。このトレーニングセッションは、スキル向上だけでなく、関係の構築や連携の側面からも学ぶことが多かったと思っている。

(高橋理都子)

↑全米大会のシミュレーションを行なっている様子②
(グループごとに分かれての議論)

～日本文化パーティー～

提携校である TCU(Texas Christian University)の学生との交流の一環として日本文化パーティーを行った。日本文化パーティーでは各グループが書道体験や日本のお菓子の試食、折り紙などいくつかのコンテンツを用意し、TCU の学生に日本の文化を楽しんでもらい、興味を持ってもらうことを目的とした。

書道体験では、トレーに張った水にインクを垂らし、半紙を染めるマーブリングを行なった。そして、派遣団員が付き添いながら、その半紙に名前など思い思いの言葉を日本語で書いてもらった。学生がマーブリングで半紙を染めるための色のインクをじっくり選び、日本語で自分の名前を半紙に真剣に書いている姿はとても印象に残った。私のペアは赤と黒と黄色のインクを選び、不死鳥という言葉を漢字で書いていた。いずれの学生も日本語に興味を示し、中には自分の名前を日本語で書けるようになるまで何回も練習している学生もいて、とても嬉しく感じた。

↑派遣団員が教えながら TCU 生が書いた漢字

↑マーブリングしている様子

日本のお菓子として、知育菓子を紹介した。今回持って行ったのは水と粉を混ぜ合わせ、ケーキやタルトを作る知育菓子である。私たち日本人にとっては子供の頃から馴染み深いものであったが、アメリカの学生にとっては目新しいものであったように見えた。知育菓子の作り方は複雑で英語での説明は難しく、苦労した部分もあったが、アメリカの学生との交流を深めるにはとても良いきっかけだった様に思える。

↑派遣団員が教え合いながら、知育菓子を作っている様子

折り紙のコンテンツでは、折り鶴やコマ、かぶとなどをアメリカの学生と一緒に折った。折り紙は日本の文化としてアメリカでも広く知られていて、学生の中には幼い時に幼稚園や学校で折り紙をしたことがあるという人も多くいた。しかし、どの学生も日本人と折り紙を折った経験はなかったようで、派遣団員の折り方の説明を真剣に聞き、鶴や手裏剣といった多くの折り紙を作った。

↑折り紙を教えている様子

日本文化パーティーを企画するにあたり、どのようなコンテンツならアメリカの大学生でも積極的に参加してくれるかを考え、試行錯誤した。西洋の文化の中で育ってきた学生に私たちの文化を紹介し、一緒に楽しんでもらうのは非常に難しいことではあったが、日本文化に実際に触れ、それを楽しんでいる彼らの姿を見て、安堵するとともに受け入れてもらえたことに喜びを覚えた。今回は短い時間ではあったが、このような小さなことがきっかけで少しでも日本の文化が世界に広まれば嬉しく思う。

(中村紫英理)

代表団員報告

坂本知陽

同志社大学経済学部
経済学科 2 年(当時)
京都研究会

UNEA(国連環境総会)

議題

1. 海洋プラスチックごみ及びマイクロプラスチックへの対処

2. 大気汚染の防止と低減による地球規模の大気質の改善

3. 電子廃棄物および危険廃棄物の責任ある処分の推進

1. 参加議場概要

国連環境総会(UNEA: United Nations Environment Assembly)は国連環境計画(UNEP: United Nations Environment Programme)の運営評議会かつ環境問題の対策を講ずる最高意思決定機関である。

21 世紀に入り、環境問題が国際問題として重要視されるようになったことから、2014 年に総会で全加盟国が参加し環境問題について議論する環境総会の設立が決まった。環境総会は通常 2 年に一度開催され、2019 年には 4 回目を迎えた。

UNEA が担う大きな役割は環境政策への優先順位付け、国際環境法の作成、などにより地球環境を改善することである。

2. 議題概要

今会議では議題 1「海洋プラスチックごみ及びマイクロプラスチックへの対処」について話し合った。

多くの生物の住処であり、私たちの健康や生物多様性にも密接に関わっている海。しかしそんな海はプラスチックの使用が盛んになると同時に汚染され、近年では年間 800 万トン以上のプラスチックごみが流れ込んでいる。

今回、議場では主に、特に直径が 5mm 以下の海洋プラスチックごみ、通称マイクロプラスチックの発生を防ぐために各国でできることについて話し合われた。私が所属していたワーキンググループ(WG: Working Group)ではマイクロプラスチックの発生に関与している、使い捨てプラスチックへの課税による規制と海に存在しているプラスチックごみの回収方法の全国への共有と促進について議論した。

3. 会議を通して

NMUN に参加するまで意見交換をする上で一番重要な力は言語能力だと考えていた。しかし、それは間違いだということに気がついた。

会議初日に多くの大使と会い意見交換をした後、最初に議題 1 を議論することが決まった。各国大使は、最終的に自国の主張が反映された決議を採択にかけるため、

20~30 人の作業グループ、WG を作る。私が担当した国がオランダだったこともあり、欧州連合(EU: European Union)の国が入った WG に所属していた。この WG で今までの成果を発揮するぞと勢い込んでいた私は、主張をグループに反映させるべくその場にいた大使にひたすら話しかけ、機会をみつけて意見を言い続けた。しかし想定以上に現実は厳しかった。載せたい文言をいくら提案しても耳を傾けてくれなかったり、聞いてもらえても相手の自信ありげな言い分に言いくるめられたかったりで議論までもっていくことができなかった。

議論へ誘導することができない自分の英語力の低さそして自分の能力の低さに絶望しながらも、今の WG が解消したことにより英語が母国語ではない大使が率いる WG に入ることになった。30 人以上の大使をまとめ上げグループの中心で働いている彼女の姿を見たとき、私に足りなかったのは自分の意見に対する自信と表現力だと気がついた。

私は今年派遣された派遣団員の中で一番英語力が低いと自他共に評価されていた。だからこそ、会議中も自分の意見に自信を持てず、表現方法としても現地の学生と比較するとジェスチャーなどを使っていなかった。結果として私はとても消極的になってしまっていた。一方、グループリーダーだった彼女は常に自信ありげで、一番言いたい部分では必ず声のトーンを変えたりジェスチャーをつけたり、現地の学生と同じかそれ以上に、積極的に伝えていた。

日本の模擬国連会議及び大学の授業では表現力を求められる機会はゼロに等しかった。また、日本人学生の特性として強く意見を主張する学生が少なかったため、表現力の必要性を強く感じたことがなかった。しかし、議場では私以外のほぼ全員がスピーチだけでなく、少人数の意見交換の時も、ジェスチャーなどを使って主張していた。そんな彼らの姿を見て、私も使ってみれば相手に話を聞いてもらえるのではないのではないかと考えた。上手いタイミングでちょうど意見を求められる機会があったため、今まで調べてきた情報の中で相手が必要としていると思われる情報を与えつつ、自分が持って行きたい方向に議論を誘導できるよう、渡米前で培った知識を最大限に活用した。すると、決して多くはなかったが、振り返って質問してくれる大使、アドバイスをくれる大使など、話を聞いてくれる大使が増え、最終的に決議に文言をのせることができた。

この会議で一番感じた感情が悔しいだった。次に世界中の人と議論する機会があればそこでは面白かったといえるようにまずは表現力を上げたい。そのために、まずは自信を持つこと、または、自信を持っているように見せるための表現力の必要性を強く感じた。私は自分の考えが表情や行動に表れやすい。だからこそ「自信」を持つためには数を重ねることが一番効果的だ。そのために、これからの大学生活及び模擬国連活動では積極的に人の前で話す機会を積極的に活用することにした。今まで人前で話

すことが苦手でできるだけ発表する機会は避けていた。しかし、NMUN で、自分を変えるためには、それが失敗でも間違えていてもいいから動き出さないと事態を変えられないと実感した。次の 1 年間は、大学の会議や模擬国連会議で積極的にスピーチを行うなど、今与えられている機会を存分に使う。

今回、自分の課題は見つかったがゴールを見つけることが出来なかった。いつの日か、自然にジェスチャーや声のトーン含め自分が持てるもの全てを使い表現できるようになることが現状の目標である。約 3 ヶ月後には次代派遣団員の選出がはじまる。彼らに私が知っていることを伝えるためにも、一つひとつの機会を逃さず、同時に、大胆に挑んでいきたい。

↑国連総会議場にて

（左：Kasie Haemker、右：坂本知陽）

日山実乃里

大阪大学法学部

国際公共政策学科 2 年(当時)

神戸研究会

UNHCR
(国連難民高等弁務官事務所)

議題

1. 難民と国内避難民のための適切なシェルターの提供

2. 難民と国内避難民の持続的な再帰と再統合の支援

3. 難民の第三定住国の収容能力の強化

1. 参加議場概要

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR: United Nation High Commissioner of Refugees)は、1950年に国連総会決議によって設立された、難民問題を取り扱う機関である。人道的見地から紛争や迫害によって故郷を追われた世界の難民の保護と難民問題の解決へ向けた国際的な活動を先導、調整する任務を負っている。難民の権利と尊厳を守り、すべての人が庇護を求める権利を行使し、安全に庇護を受け、延いては自主的に帰還、あるいは庇護国に定住、または第三国に定住出来るように努力している。設立以来ここ60年以上にわたり、数千万人以上の生活の再建を支援し、現在は約9700人の職員が世界約125カ国で6800万人以上(内約4000万人が国内避難民、約2000万人が難民)の支援に従事している。

2. 議題概要

会議で話し合ったのは議題3「難民の第三定住国の収容能力の強化」である。昨今難民が増えている中で、第三定住国として指定されているのは未だ37カ国にとどまっている。どの分野を強化して拡大に努めていけばいいのか、そして新たな再定住国を増やすために現在の再定住国ができる事は何か、を話し合った。

私は、特に再定住国先での難民の社会的統合について話し合いたく、そのような趣旨のメールを各国大使に送った。翌日は社会的統合の中でも教育に着目するグループと経済的支援に着目するグループに分かれ、私は教育についてのグループに所属した。私のグループには前日に送ったメールを見て賛同してくれた大使が多く、議論も円滑に進めることができた。難民は、コミュニティー先で生じる現地民との壁により、就職困難といった様々な弊害を受ける。その地における繋がりというのが、社会で生きていくうえで大事な要素であると考えた。そこで私は難民に定住した地域やその地域の人々と繋がりを得る機会を与えるため、定住先の伝統工業に基づいた職業訓練の支援を行うことを政策として掲げた。グループ内では、職業訓練のほか、学校教育の改善を図る政策も多く提案された。

3. 会議を通して

私は、「やらない後悔よりやる後悔」をモットーにしてこの全米大会に挑んだ。実際会議が始まる前までは、不安と緊張で胸がいっぱいだったが、始まってしまえば、日本人なんて全くいない環境、もうやるしかない!という思いに駆られた。この会議で、私はプレゼンスを発揮するためにとにかく積極的に行動することを心がけ、初日から多くの大使にメールを回したり、ワーキンググループのまとめ役を行ったりすることが出来た。また、決議文の提出の際には、これまでのDDPで学んだことを活かして、体裁直しに貢献することが出来た。4ヶ月にも及ぶ長い研修期間を経てこの大会に来ていることは自信にもつながったと思う。海外の学生はあまりリサーチして来ていないことが多く、すでに行われている政策やマンデート外の内容を指摘することで、より良い決議文を目指すことができた。そして、困っている大使がいたら積極的に声をかけにいって、グループでの団結と同様に一対一での仲も大切にした。私のワーキンググループは、ドイツ･イタリア･ベルギーの学生もいて、お互いに母国語ではない言語を話す難しさを共有していたので、それが励ましにもなって、頑張ることが出来た。

しかし、上手くいかなかったこともある。一つ目は英語での議論においてプレゼンスを発揮出来なかったことだ。臆せず議論に参加する事は勿論大事だが、一番大事なのは参加した後にどれだけ存在感を残せるのかという事である。聞き取るだけではなくて、その議論に一大使として意見をきちんと残すということが大事である。私は何回も意見を言ってみたものの、それが重要な意見として拾われていなかったことがあった。その時は、本当に悔しかった。けれど、今まで全米大会に参加するまでにやってきた事を思い出し、ここに来た意義を考えると自然と勇気が出て自分の中で出来る最大限のことをしようと思い、何度も挑戦した。会議は本当に早いペースで進んでいく。その中で自分がすべき役割、自分が大使として出来ることを必死に探すことが大事だと感じた。二つ目は、自分の話し合いたいトピックを話せるということや、マスターになる機会があったことなどから、自分のワーキンググループから離れる機会を逃してしまったことである。もう少し、他のワーキンググループとも交渉したり、他の決議案のシグナトリーに入ったりしたかったとも思う。自分のグループのことだけではなくて、広い視野でどう行動するかを考え、早いうちから動くことが大事だと痛感した。

全米大会で組んだペアやグループの仲間は、外交とはどうあるべきなのかということを私に考えさせてくれた重要な存在であった。私のペアは、色々な大使と話をしたり、文言を載せに行っていたりしていて、会議に慣れているとても頼れる存在だった。昼食の時間は、一緒に食べに行こうと誘ってくれて、進捗状況を確かめ合ったりお互いに上手くいかなかったことを共有したりしながら励まし合って、午後からまた頑張ろうと思わせてくれた。グループの仲間は、

指示しながらも人の意見をきちんと聞く友好的な大使であった。他の大使は私に、頼れる大使ということがどれほど外交において大切かを教えてくれた。

今会議を終えて感じるのは、英語が母国語ではなくても一生懸命伝えれば分かってもらえるということ、そしてとにかく積極的な姿勢が大事だということだ。これは、模擬国連においてだけではなく、これからの生活においてもいえるのでないか。今回私がモットーにしていた「やらない後悔よりやる後悔」。やって後悔していることはないが、確かに悔しい思いはした。でも、それはやらなかったら味わうことのない感情。この感情を知った私は、前の自分より強いだろうし、いまの自分を越えていけるようにこれから努力していきたい。

今後の模擬国連活動では、積極性を持続させて、しっかりファシリテート出来るような大使、そして周りを気にかける大使になりたい。模擬国連で培われる力は、社会人になっても役立つ。今回 Outstanding Position Paper Award をいただいたことも糧にしてこれから待ち受けている数々の会議を真剣に取り組み、自分を成長させていきたい。

(左: 日山実乃里、右: Matt Brown)

↑国連総会議場にて

渡米を終えて

坂本知陽

小学生までの私は常に「夢」を持っていた。それは時に将来の夢であり、時に目指したい姿でもあった。小学校の卒業文集には大きな字で「パティシエになりたい」と書いていた。

しかし、大きくなった私は「夢」を持っていなかった。そのことに危機感を覚えた私は、大学に入ってから今に至るまで、常に「何をしたいのか、何に挑戦してみたいのか」と自分自身に問いかけ続けている。当事業への参加を決めたのは、自分とは違う場所で育った人にたくさん出会い、話を聞くことが、自分の「夢」を見つけることに繋がる可能性があると考えたからだ。

結論から述べると、渡米及びこれまでの全米団プログラムを通して、今まで以上に多くの人の価値観を知ることができ、自分自身への問いかけに答えるための大きなヒントを得られた。その一方で、自分にとっての新たな課題と対峙することとなり、特に大会中の経験は苦いものばかりであった。

これまでの全米団プログラムによって劇的に自分の将来に大きな影響を受けたとは思わない。選考会議から渡米を終えるまで多くの人に出会い、それぞれの考えや価値観を共有することができたことは私にとってよい刺激となった。それまで念頭になかった選択肢や物事の捉え方に出会うことが出来たからである。特に「夢」を持つ彼らと交流することは適度なプレッシャーを私に与えてくれた。また、彼らの話によって、自分の無知を知ると共に知見を広げることができた。私は、自分の興味がある分野しか勉強しない傾向にあったが、出会った人と対等に話をするためにはたとえ興味が薄い分野であったとしても教養として学ぶことが重要だと感じた。

たくさんの良い経験、思い出を作ることが出来た一方、苦い経験から、自分が常日頃考えている問いへの答えに近づく大きなヒントを得ることができた。

NMUN は、今まで出場した模擬国連会議の中で一番リサーチをしたため、議場で成果を残すことが出来る自信があった。だが、実際は自分が納得するような会議行動を取ることが全く出来ず、自分が設定した目標すら達成できなかった。私は「夢」を考えるあまり知識の使い方を知らなかった。

今の私は、日本だけでなく世界での自分の能力をある程度知っている。残りの 1 年間で、まずは今回自分が出来なかった点の向上に努めたい。具体的には知識をつけるだけでなく、その知識の活かし方、人を動かすために行うべき自分の行動などを身につけたい。そして、引き続き「自分がなにをしたいのか」など自分の「夢」について考え続けたい。そして、「やりたい」と思ったことはできる限り全力で挑戦し、じっくり、しかしながら速やかに「夢」とはなにか考えていくつもりだ。

さて、今回の渡米は私にとって成功だったのか、失敗だったのか。今の私には答え

ることができない。なぜなら、ようやく今37代運営局員としてスタートラインにたったばかりだからだ。幸いなことに、来る1年で今まで以上に多くの人に出会うことができ、また新たな刺激を受けるだろう。だが、次は刺激を与える側にもならなければならない。1年後、私は何を感じているのだろうか。今の「夢」は全力で当事業と共に多くの事に挑戦して成長することだ。

日山実乃里

「さらなる高みを目指して」

ずっと国連に興味があり、国連職員に憧れ、国連の会議を模擬するなんて絶対面白い!と思って始めた模擬国連。まだ始めて1年と少ししか経っていないが、模擬国連の奥深さを会議ごとに感じると共に、模擬国連を通して尊敬出来る先輩、信頼し合える同期に出会うことができた。そして、この渡米。私にとってかけがえのないものになった。ずっと夢見ていた国連職員に一歩近づけた気もする。国連本部を訪れ、国連職員からの生の声を聞き、会議では海外の学生と国際問題を一国の大使として英語で話し合うことも経験した。

当事業は、模擬国連の存在を知った時から興味を持っていた事業であり、絶対に私もその一員になりたい!と思っていた。晴れて派遣団員となり4ヶ月ほど、自分の参加する議場に関して問題分析、政策立案を行い、そしてプレゼンテーションのスキルを学んだ。時には辛いこともあったが、全派遣団員と励まし合いながらやり遂げ、渡米を終えた今は、先輩から様々な指導をもらえたことに対する感謝の気持ちでいっぱいである。当事業の強みであるブリーフィングは、他では経験出来ない貴重なものである。どの国連職員も行動力があり、その力があらゆる所で活躍するチャンスを逃さない原点なのだとも感じた。プロジェクトチーフを務めている方も沢山おり、世界の最前線で活躍する日本人の方から直接お話を伺うことができたという経験はとても刺激を受けた。

そして全米大会。海外模擬は日本の模擬よりも協力する、議場に貢献することが重視されており、私はこの全米大会で外交官/大使としての理想像を追い求めることが出来た。日本の模擬国連とは少しスタイルが違い、双方に長所と短所があると思うが、海外模擬のスタイルを知りそして経験した今は、それを上手く日本模擬にも応用して、より優秀な外交官像を追い求められるような模擬国連を目指していきたいと思う。また、模擬国連の良い所の一つに、国際問題や社会問題について真剣に語り合える仲間が出来る、刺激を与えてくれる仲間に沢山出会える、といったことが挙げられる。海外の学生ももちろん例外ではない。Texas Christian UniversityやNMUNで出会った学生達と、宗教の話や難民移民問題について議論した。バックグラウンドが違うだけあって、感じ方もそれぞれで、多文化交流の醍醐味を感じることも出来た。

そして渡米を終えた今思うことは、当事業は私に夢と真摯に向き合う機会を与えてくれた、ということだ。これまでは「国際系」の進路に進みたいといった漠然としたことしか頭に思い描けていなかったが、渡米までの4ヶ月に及ぶ準備期間、そして渡米先での国連職員とのブリーフィング、全米大会を経験して、夢についてより明確に、そして具体的に考えることが出来るようになった。特に、渡米までのリサーチや渡米先での国連職員からの生の話は、今の世界に何が足りていないのか、私達は世界を救うために何ができるのか、といった問いに対する答えを導くヒントをたくさん与えてくれた。学生のうちに出来ることを日々模索しながら充実した日々を送っていきたい。そして、当事業の運営はもちろんのこと、これからも模擬国連会員として自分を成長させていけるように日々精進していきたい。

第 2 章

運営局員

8. 運営報告

運営統括

同志社大学経済学部
経済学科 3 年
京都研究会

坂本知陽

1. 役職概要

運営統括の仕事はその名の通り、運営局の活動を統括し、円滑に事業運営を進めることです。事業の指揮、各役職の仕事の監督およびサポート、役職間の連携の促進などを行います。また例年、団長職と兼任で務めます。今年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により渡米プログラムが中止となったため、団長報告は割愛いたします。ご了承ください。

2. 実行事項

本年度の運営の流れは下図の通りです。

時期	行事
2019 年 4 月	・運営コンセプト決定 ・第 37 代派遣団員募集広報開始
5 月	・全米大会提携校決定
6 月	・第 37 代運営局正式発足 ・選考概要公開
7 月	・第 37 代派遣団員選考基準決定 ・応募要項公開
8 月	・第 37 代派遣団員募集開始 ・模擬国連英語会議開催
9 月	・第 37 代派遣団員第一次選考 ・全米大会参加諸手続き
10 月	・第 37 代派遣団員第二次選考 ・第 37 代派遣団員発表
11 月	・全体 DDP①実施 ・全米団 OBOG 会開催
12 月	・地域 DDP①実施(関東・関西)
2020 年 1 月	・地域 DDP②・③実施(関東・関西)
2 月	・全体 DDP②・③実施 ・政策発表会開催
3 月	・全体 DDP④実施(オンライン) ・第 37 代日本代表団渡米プログラム中止を決定
4 月	・第 37 代派遣事業報告書執筆
5 月	・オンライン体験会実施 ・第 37 代派遣事業報告動画公開 (事業報告会中止に伴い)

以上が主な事業の流れとなります。運営統括は、これら全てにおいて担当者と連携しつつ、運営全体を俯瞰して指揮監督しました。また、毎週のミーティングの管理、各役職の仕事の進捗確認やサポート、事業の代表としての外部への対応を行いました。

3. 振り返り

この一年を通して私は多くの「決断」に迫られました。A か B か。日常生活において何かを決断せねばならないとき、論理的に決断するのではなく、自分の直感に従っておりました。しかし、運営統括としての職務を果たす過程で、当事業に関わる決断をする場合には、なぜ A を選んだのか、B を選ばなかったのか、その意思決定過程は妥当であるかについて考えることが求められました。特に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の状況を鑑みた渡米プログラム中止の決断は苦しく最も難しい選択の一つでした。

私の「決断」は時に間違っていたかもしれません。しかし、十分に考え抜いた上での「決断」は最善の結果を生み出すよう尽力する糧となりました。本役職を経験していなければ、「決断」の難しさと重要性を理解することができなかったと思います。この役職を務める機会を得られたこと、ならびに選択の際にご協力いただきました皆さまに今一度感謝申し上げます。

さて、本書の執筆および次代へ当事業の襷を渡す準備を進めるにあたり、再度、運営統括の在り方についてしばしば考えております。しかし、1 年間の職務を終えてもなお、その問いへの答えを用意することの難しさを実感しております。

振り返りますと、就任当初は「運営統括=リーダーとして皆を一つの方向にまとめる人」というイメージを抱き、常にしっかりしておかなければという焦りから、一人で突っ走り、空回りばかりしていました。

しかしながら、次第に運営局員との距離も縮まり、互いの事についてより詳しく知っていくうちに、皆を「率いる」存在で有り続ける必要はないことに気づかされました。イメージの中のリーダー像にこだわらず、局員一人一人と向き合いながら、背伸びをせず自分が出来ることを一つずつ堅実にこなしていくことを決めました。

第 37 代運営局員は各々が鮮やかで違う色を持つとてもカラフルなメンバーです。時には、色を主張するあまり衝突する場面もありましたが、それ以上に他の人が持たない色を持ち、それを誇りに染まることなく貫き通すことができる運営代だったと思います。一つずつ自分が出来ることから取り組む中で、この色を消すことなく彩り続けられるようなリーダーになりたいと自然に感じ、運営局員一人一人の力をより引き出し、時には背中を押せるような人になろうと「決断」しました。

さて、私が目指した運営統括像を実現できたかはわかりません。しかし、改めて運営統括の在り方について言えることがあるとすれば、良くも悪くも一般的に抱かれるリーダー像にとらわれる必要は全くないということです。可能な限り仲間と語り合いながら運営統括としての在り方、運営局への向き合い方を探していくことが必要であると学びました。

最後になりましたが、いつもご支援･ご協力いただいております、当事業 OBOG の皆様、共に切磋琢磨しながら一年間共に当事業の運営活動に励んだ第 37 代運営局員をはじめとする私を支えてくださった全ての方に、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

副団長

大阪大学法学部
国際公共政策学科 3 年
神戸研究会

日山実乃里

1.　役職概要

副団長は、運営局員のサポートを主な業務とします。運営統括が長期不在の時には、運営統括に代わって運営を取り仕切ることもあります。

副団長は運営代により在り方が異なるため、そういった点で仕事の裁量が大きい役職です。仕事の幅の広い役職だからこそ、各運営代の在り方や方向性に大きく影響を与えます。全米団という一つの事業を運営していく中で、運営統括と他の運営局員、運営局員と派遣団員を繋ぎ、当事業内のより良い人間関係の構築に尽力することから、当事業の成功の鍵を握る役職です。

2.　実行事項

本年度は、副団長の仕事の大半を占める、各役職のサポートに加え、新歓の統括の仕事を担いました。

各役職のサポートに関しては、各役職の忙しい時期にはこまめに連絡を取り、仕事の補助を積極的に行っていきました。運営統括が忙しい際には、ミーティングのファシリテーターを代行することもしていきました。各役職が果たす仕事の充実度を高められるようにサポートすることができたと思います。

新歓に関しては、誰が統括するのか明確に決まっていない活動でしたが、今年は副団長が新歓統括として進めてまいりました。情報処理担当を兼任していたこともあり、副団長として新歓統括をしながら情報処理として SNS で新歓の情報発信を行いました。

3.　振り返り

副団長というマンデートの広い役職の業務をどう遂行していけばいいのか試行錯誤しながら 1 年間取り組んでまいりました。結局のところ、自分で周りをよく見ることが副団長の役割を遂行する上で大切なことだったと感じます。運営局員のサポートをする上で、それぞれの仕事の進め方、性格などに配慮しました。運営局員の中には相談にのってほしい人もいれば、自分で全て仕事を進めたい人もいます。連絡の頻度を変えたり、見守って様子をうかがったりと、あくまでも副団長は各役職の補佐役であることを忘れずに、仕事のサポートを全うすることができたと思います。

また、新歓に関しては、情報処理と兼任していたことで仕事をスムーズに進めることができました。どの役職が担当するのか決まっていない活動でしたが、新歓の時期は新入生に対して当事業を知ってもらうことのできる一番良いイベント期間であるため力を入れていくべきだと改めて感じました。

副団長の仕事は各運営代の特徴を踏まえて見つけていくものだと思います。1 年を通して第 37 代運営局の副団長としての仕事を見つけ、全うすることができました。

総務

津田塾大学学芸学部
国際関係学科 3 年
国立研究会

高橋理都子

1.　役職概要

総務担当の業務は、事務作業と対外の窓口業務に大別できます。事務作業では、当事業が主催する各種行事実施に際し、会場・備品の手配、資料作成、広告の作成等、多岐に渡る業務を実行します。また、対外の窓口業務では、当事業へのお問い合わせ全般に対応します。業務は個人で完結するものだけでなく、他の役職と連携するものもあります。そのため、運営局内の調整も重要です。

2.　実行事項

総務担当の仕事は2019年の4月から始まりました。まず、先代総務担当とガイドブックの作成と事業報告会に係る準備をしました。ガイドブックは、事業報告会に合わせて当事業ホームページで公開し、報告会も成功を収めることができました。その後、7 月には同時期に関東で開催された当事業相談会に係る準備に加え、第 19 回模擬国連会議関西大会で配布する広告の作成と当事業派遣団員の選考プロセスに向けた本格的な準備を始めました。広告は、運営局員と共にデザイン･掲載内容を検討しつつ作成しました。選考プロセスの準備は、研究担当･選考プロセス担当と共に 4 月から調整を進めていました。7 月からは運営局内での調整に加え、選考プロセス実施に伴う日程調整、会場と備品の手配、資料準備、課題の管理、応募者からのお問い合わせへの対応が始まりました。本年度は、台風 19 号の影響で国立オリンピック記念青少年総合センターにて実施予定でありました会議型コンテンツが中止になったため、急遽その対応も行いました。派遣団員選出後は、DDP 実施のための会場と備品の手配をしました。この準備と同時並行で政策発表会の準備も始め、会場と備品の手配、当日資料の作成を行いました。政策発表会当日は、機材トラブルに伴う会場変更に係る対応がありましたが、会は無事閉幕することができました。

3.　振り返り

最大の反省点は、業務管理の詰めの甘さです。例えば、選考プロセスに係る業務での反省が挙げられます。4 月から関係役職で調整を行い、細分化すると 50 を超える業務内容を把握していました。しかし、作業計画の作成が具体的な内容まで落とし込めておらず、その共有も不十分でした。これが後に関係役職との連携に支障をきたす原因となりました。短期的かつ長期的視点をもち、業務計画の作成や期限の共有を綿密に行うべきでした。反省は、改善策も含め次代に引き継ぎを行います。

本年度は、不測の事態に見舞われることが多く、その都度、柔軟な対応が求められました。運営局員の協力があってこそ、この業務を完遂できたと実感しております。

以上をもって総務担当の報告といたします。最後になりましたが、当事業への多大なるご支援に心から感謝を申し上げます。

渉外

関西学院大学国際学部
国際学科 3 年
神戸研究会

尾島百合子

1.　役職概要

渉外活動では主に 2 代後の事業資金･渡米費用の調達、そして対外窓口として渉外補佐、運営統括と連携を取りながら活動を行います。主に助成財団の方々に対して事業概要や実施目的をはじめとした長期的な事業の展望の説明を行い、また財政状況の管轄の一環として、企業などに協賛の依頼を行います。事業終了後には、事業報告そして次年度の渉外計画を構想します。

2.　実行事項

本年度の渉外活動では主に助成財団への申請、新規渉外先の開拓を行いました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行の影響により、残念ながら渡米プログラムを中止とする結果となりましたが、本年度も財団様、そして日本模擬国連および OBOG のご支援により、団員育成プログラム（DDP：Delegates Development Programme）、政策発表会などを実施することができました。

国際系団体が多い中、他団体との差別化を測ることが課題となり、無念にも新規渉外先を獲得することはできませんでしたが、今後も当事業の発展と認知度向上、そして資金調達のための新規渉外先獲得のみならず、幅広い分野での渉外活動を行っていきたいと思います。

3.　振り返り

渉外担当としての 1 年間を振り返ると日々が学びの連続でした。主な連絡相手が社会人であったため、名刺交換、メールや電話の対応など普段の大学生活では得難い多くのことを経験しました。学生時代にこのような機会を与えられたことをとても光栄に感じます。

同時にこの 1 年間は運営局員に助けられた日々でもありました。本年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響を受け、渡米プログラムの中止をはじめとする当初の事業計画からの大幅な変更が生じたため、助成財団の皆様にはご迷惑をおかけしました。しかし、このような想定外の状況下でも常に支えてくれ、そしてともに議論をし、対応をしてくれたのが運営局員です。彼らには感謝しても感謝しきれません。

本年度の渉外活動では、当事業の課題の一つである他団体との差別化という問題を解決できなかったことが心残りではありますが、これからも模擬国連の認知度向上、発展に向けて渉外活動に精進してまいります。

事業運営に携わることによって得難い経験ができたことを嬉しく思うとともに、1 年間ここまで支えてくださった多くの関係者の方々、そして運営局員に感謝申し上げます。

渉外補佐

国際基督教大学教養学部
アーツ･サイエンス学科 3 年
国立研究会

向後大翔

1.　役職概要

渉外補佐は、当事業の渉外活動のうち、顧問の先生方およびご後援をいただいている団体との連絡を担当しています。具体的には、関係省庁や国連機関などへの後援名義使用申請、顧問の先生方の政策発表会などへのご招待、事業報告書の送付などを行っています。また、渉外活動に使用する事業概要書や企画書などを作成しております。これらの他にも、渉外担当の業務のサポートをしております。

2.　実行事項

本年度は新たに国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所(UNIDO ITPO Tokyo: United Nations Industrial Development Organizations Investment Technology Promotion Office, Tokyo)に後援名義の使用申請を行い、これを快諾していただきました。

2 月 9 日開催の政策発表会には、顧問の荒島千鶴先生、敦賀和外先生、吉川元偉先生、また、UNIDO ITPO Tokyo 次長の村上秀樹様をお招きし、派遣団員が立案した政策に対するご意見･ご指摘をいただきました。

3.　振り返り

先述の通り、大変お忙しい中、4 名の専門家の方々に政策発表会にお越しいただき、派遣団員の立案した政策に対するフィードバックをいただくという貴重な機会を設けることができ、大変嬉しく思います。また、UNIDO ITPO Tokyo の村上様には国連大学ビル内の同事務所に複数回お招きいただきました。同ビル内の案内、国連職員への道のご指南など、派遣団員だけでなく、私にとっても大変学びの多い機会を提供してくださいました。

一方で反省点も数多くあります。顧問の先生方を訪問し、お話をおうかがいすることができなかったのは大変残念です。また、推薦文執筆のお願いがしめきり間近となり、ご迷惑をおかけしたこともありました。先代から引き継いだ後援団体と当事業の関係性の強化に関しては、私なりにヴィジョンをもち、他の運営局員とも共有し、その履行に努めました。上記の UNIDO ITPO Tokyo のような新たな取り組みにみられるように、ある程度の成果を残すことができましたが、私の力が及ばず、先述の課題がクリアされぬまま運営代終了を迎えました。この点に関しては次代に引き継ぎを行い、私自身も OB として当事業のさらなる発展に尽力する所存です。

渉外補佐の職務を含む、当事業運営局員としての業務は普段の大学生活では経験することのできないものであり、大変貴重な一年間となりました。末筆になりますが、この場をお借りし、日頃より当事業を温かくご指導くださっております顧問の先生方、また本年度ご後援を賜りました後援団体の皆様に感謝申し上げます。

会計

関西学院大学国際学部
国際学科 3 年
神戸研究会

尾島百合子

1.　役職概要

会計担当は、運営代の運営状況を踏まえながら予算を作成し、随時改訂を行います。事業終了後には決算書を作成します。そして、ご支援をいただいている渉外先にこれらの予算案･決算書を提出する渉外業務も行います。また、年間を通じ、イベントごとに予算を立て、総務や運営統括、イベント担当者と連携を取りながら支出入管理･口座管理を行います。

2.　実行事項

本年度の会計では、予算案･決算書の作成と改定、支出入および口座管理、そして渉外業務を実行しました。第 37 代運営局では、例年よりも関西地区の派遣団員を多く選出したことに伴う国内交通費の増加、そして提携校との兼ね合いによる渡米スケジュールなどの状況を考慮し予算を作成しました。また各プランの変更やレート等の変動による米国内滞在費の変化に合わせ、予算案を随時改定する必要がありました。同時に、提携校と米国内滞在費に関する交渉を行いました。運営局の支出入の管理では、予算をもとに DDP、英語会議、政策発表会などのイベントごとに必要な費用を計算しました。また、助成財団様や日本模擬国連への助成金申請の際には予算案を、事業終了後には決算書を提出する渉外業務も行いました。

3.　振り返り

今年の会計業務では新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、レート変動や大幅な渡米プログラムの変更が生じたため、予算･決算書を常に改定しなければいけませんでした。このような事態は前例がなかったため、大きな挑戦となりましたが、運営局員が支えてくれたため、無事乗り越えることができました。

私が 1 年間会計担当を務めて感じたことは、責任感の大きさです。会計では、特に表立って行う仕事はありませんが、予算によって当事業の実施プログラムの内容を大きく変動させることがあるため、少しのミスも許されません。予算作成や支出入管理など、私にとって初めてのタスクが多かったため、時には臨機応変に対応することが難しかったです。また、当事業の運営状況により、自己負担金の増加や事務費の制限をせざるを得なかったことから、自分の準備不足を痛感しました。しかし、このような貴重な経験ができ、とても嬉しく思います。

最後に当事業を支えてくださっております各財団様、日本模擬国連、OBOG の皆様、そしてここまで共に歩んでくれた派遣団員･運営局員、このような素敵な機会を与えてくださった多くの関係者の皆様に感謝申し上げます。

報告会

青山学院大学経営学部
マーケティング学科 3 年
日吉研究会

中村紫英理

1.　役職概要

報告会担当は当事業が毎年 6 月頃に関東および関西にて開催する、事業報告会に関わる業務の総指揮を行います。事前準備の主導はもちろん、当日は司会進行を務めます。事業報告会では当事業の渉外先や顧問の先生方、日本模擬国連会員の皆様、そして一般の方々に当事業の活動内容をお伝えします。

2.　実行事項

報告会担当は、自分が派遣団員として渡米した年、そして帰国後運営代として事業運営をする年の計 2 回、事業報告会関連の業務に携わります。

そのため、私も第 36 代派遣事業の関西事業報告会では当日の司会を務めました。当時の運営局員に支えてもらいながらも、事業報告会にお越しいただいた方々に当事業のことをよりわかりやすく伝えるためにはどうしたらいいのかということを常に念頭に置きながら進行しました。

本年度も、第 37 代運営局の報告会担当として事業報告会の企画書の作成や運営局内での会議など報告会に向けた準備をしていましたが、第 37 代派遣事業の事業報告会は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で実施することはできませんでした。しかしながら 1 年間の事業の成果についてまとめた動画の作成およびオンライン体験会を企画し、これらを実行しました。オンライン体験会では当事業の DDP で行うようなグループディスカッションを参加者の方々に体験していただいた他、派遣団員･運営局員に対して直接質問ができる機会を設けました。

3.　振り返り

昨年度は、関西事業報告会で司会を務めましたが、業務内容やわからないことをもっと当時の運営局員に質問し、より積極的に関わることができればよかったと思っています。

本年度の事業報告会は、不可抗力だったとはいえ、例年と同様の対面での事業報告会が実施できなかったことが悔やまれます。事業報告会は開催することはできませんでしたが、オンラインでのコンテンツもターゲット層をはっきりさせたり、そのコンテンツがどう影響するのかをより深く分析したりすることができれば、より良いコンテンツが実施できたと思います。

次期報告会担当は例年と比べて、報告会担当として携わることができる事業報告会が 1 回分減ってしまったことになります。私が経験したことをしっかりと引き継ぎ、来年度の事業報告会がより良いものとなるようにサポートする所存です。

報告書

大阪大学法学部
国際公共政策学科 3 年
神戸研究会

日山実乃里

1.　役職概要

報告書担当は、派遣団員による DDP や政策発表会に関する報告、派遣団員を終えて感じたこと、さらに運営局員による運営報告を 1 つの事業報告書に編纂します。具体的には、主に本報告書の編纂過程のスケジューリング、派遣団員運営局員の執筆の統括、校閲統括、印刷業者への依頼、事業報告書の管理などを担います。

また当事業報告書は渉外先･顧問の先生方･渡米時のブリーフィング先への渡米報告･運営報告や、新しい派遣団員の勧誘、そして当事業の活動を記録として保管する役割を担っています。

2.　実行事項

今年の実行事項は主に 2 つあります。1 つ目は、事業報告書を製本版とインターネット版の 2 種類に分けて作成したことです。事業報告書はこれまで販売形式を取っていましたが、より多くの人に当事業の内容を知ってもらいたいという想いから 2 種類の事業報告書を作成することに至りました。製本版は、主に渉外先･顧問の先生方･渡米時のブリーフィング先を対象に、そしてインターネット版は一般の方･日本模擬国連会員を対象に作成しました。2 つ目は、事業報告書の内容の変更です。本年度は、渡米プログラムを実施できなかったため、派遣団員の章は例年とは異なるコンテンツにしました。例年は渡米報告を主眼に置いていましたが、本年度は DDP や政策発表会に焦点を当て、そこから学んだことや派遣団員を終えて感じたことを執筆してもらいました。これを機に、当事業には渡米プログラム以外にも学べる機会がたくさんあることを知っていただければ幸いです。

3.　振り返り

今年は渡米プログラム中止という予期せぬ事態となり、報告書担当としても内容を変更するなど柔軟な対応が求められましたが、うまく対応ができたと思います。また、以前から当事業の課題となっていた事業報告書の公開範囲の拡大についての議論を主導し、大学生が情報を得やすい方法や販売形式のデメリットなどに着目することでインターネット版の作成を提案し実行に移すことができました。事業報告書は今まで事業報告会での販売のみでしたので、存在を知らない方もいらっしゃいました。しかし普段の広報活動だけではお伝えすることのできない内容が事業報告書にはつまっています。インターネット版を作成することで、より多くの人に手にとっていただけると嬉しいです。そして本年度作成したインターネット版の反応などを次代に引き継いで、より良い事業報告書作成を目指します。

以上をもって、報告書担当の報告とします。

情報処理

大阪大学法学部
国際公共政策学科 3 年
神戸研究会

日山実乃里

1.　役職概要

情報処理は、広報の活動を担います。HP･Facebook･Twitter･LINE@･Instagram の 5 つのツールを駆使し、様々な企画を立てながら、インターネット上で不特定多数の人に向けて当事業の活動内容を発信します。広報計画の策定、派遣団員･運営局員への広報文執筆依頼、新歓期間の情報発信や紹介動画作成などが主な仕事内容です。

特に新歓期間や選考応募期間は、広報の工夫の仕方次第で新入生の当事業への関心度を高めることができます。

2.　実行事項

本年度は、例年と広報企画が似通ったものにならないように、派遣団員･運営局員の研究会や全国大会での活躍報告等の新しい広報企画を多く実施しました。

また、当事業は堅い団体とみられることが多々あり、敬遠されている部分があったと感じています。このイメージを変え、より親しみやすく、興味を持ってもらえるようにするために、新歓期には派遣団員･運営局員の人物紹介を行い、事業だけでなく所属メンバーについても知ってもらえるように工夫しました。

さらに、各 SNS のエンゲージメント数の比較より、Twitter から当事業の情報を得ている人が一番多いということが分かったため、Twitter を中心として動かしていきました。HP･Facebook は定期的に更新することを心がけ、Instagram は今まで更新頻度が少なく単調だったので、当事業の紹介をハイライトに載せたり IGTV を活用したりしました。また LINE@は当事業に興味ある学生が自発的に登録しているため、イベント紹介や広報文を頻繁に流すよう心がけました。

また、全日本高校模擬国連大会での広告配布を行い、将来的なターゲット層になる高校生に早くから当事業の存在を知ってもらえるよう尽力しました。

3.　振り返り

情報処理の仕事に携わり、感じたのは広報が与える当事業への影響力です。新歓や選考プロセスにしても、政策発表会を行うにしても、広報を戦略的に行っていかないと集客率をはじめとする結果が大きく左右されることを実感しました。情報発信というと簡単に聞こえるかもしれませんが、どんなコンテンツにするのか、どんなデザインであれば当事業の魅力を効果的に伝えられるのかなど複合的に考え、常にそれらを意識して広報しました。幸い、私は普段から SNS をよく利用しているため、こまめな情報更新や若者の主流になりつつある Instagram での発信も積極的に行うことができました。今後も引き続き当事業を広く知ってもらうために様々な企画を考えて発信していってほしいと思います。

研究

一橋大学法学部
3 年
国立研究会

出来悠果

1.　役職概要

本役職は、選考プロセスにおいて行うコンテンツの一部の設計や実施を主導し、また選考プロセス担当の業務の補佐を行います。各代によって本役職の業務内容は大きく異なっていますが、全ての応募者が一堂に会して行う「会議型コンテンツ」の設計及び実施における指揮に関しては、本役職が担当する場合が多いです。さらに、本役職は、各代の必要に応じて DDP や派遣団員の全米大会出場準備の補佐を行います。

2.　実行事項

本年度の研究担当が行ったことを、派遣団員決定前と派遣団員決定後に分けてご説明します。

① 派遣団員決定前

選考プロセスの設計の補佐及び本年度の会議型コンテンツである「政策立案コンテンツ」の設計を主に担当しました。従来は会議型コンテンツとして選考会議を実施していましたが、応募資格や選考で測りたい能力の昨年度からの変更をふまえて、本年度は大人数で行うグループディスカッションのようなコンテンツを企画しました。政策立案コンテンツでは、応募者が論文課題に取り組む中で各自立案した政策を、他の応募者と議論するなかで、ブラッシュアップさせることを想定していました。しかし、本コンテンツ実施予定日に、勢力の強い台風 19 号が日本列島を襲来するという予報をふまえて、当事業運営局は本コンテンツの実施を中止することを決定しました。

② 派遣団員決定後

主に全米大会に向けたポジジョンペーパー執筆の指導や全米大会を模した英語会議の企画を主導しました。本年度も昨年度同様、ポジションペーパーの執筆指導には力を入れましたが、本年度は、昨年度の反省をふまえ政策発表会からポジジョンペーパーの締切までの期間を長くとり、派遣団員が執筆に注力できる時間を確保しました。

3.　振り返り

最大の反省点は、リスクの予測が甘かったことであると考えています。本年度の会議型コンテンツは、大型台風の襲来のために中止としましたが、企画段階ではこのような事態の発生は想定しておらず、急遽様々な面で対応を行う必要が生じました。前もって、あらゆる事態についての想定をしておくべきであったと考えています。

また、忙しい時期に作業や関係役職への情報共有が遅れがちになったことも反省点です。綿密な作業計画の作成や、徹底した進捗共有を行っておくべきでした。

本年度の反省点については次年度以降に引継ぎ、当事業のさらなる改善を図って参ります。最後になりましたが、当事業をご支援してくださっている全ての方に、心より感謝申し上げます。以上をもちまして、研究担当の報告とします。

選考プロセス

上智大学法学部
国際関係法学科 3 年
四ツ谷研究会

横山咲希

1.　役職概要

次年度の全米大会に派遣する日本代表団員を選出するために実施される選考プロセスの設計･実行を統括します。具体的には応募資格の策定、配布書類の準備、選考課題の設計･実行、レビューの実施など、選考に関連した多岐にわたる業務を運営局の中心となって遂行します。

2.　実行事項

⓪ 準備(4~5 月)

選考コンセプト決定、応募者ターゲット層の分析、応募要項作成、選考方針のすり合わせなど、選考プロセス実施にあたり前提となる部分を運営局内で固めました。

① 選考課題の設計(5~8 月)

選考課題(応募課題/面接･ディスカッション/レポート課題/政策立案コンテンツ)の設計をしました。課題設計に加え、採点基準の策定も行いました。

② 選考プロセスの実施(8~10 月)

8 月を応募期間とし、9~10 月の 2 か月間で選考プロセスを実施しました。選考期間中は、実行の指揮やタスクの採点、運営局内の議論の統括をしました。本年度は 9 名を第 37 代派遣団員として選出しました。

③ 選考プロセスフィードバック(11 月~)

選考の経験を今後に活かしてほしいとの思いから、参加者全員に対して全体レビューおよび個人レビューの書類を配布しました。

3.　振り返り

ここ数年間、一部の所属メンバーから当事業の人材の質の低下が問題視されてきました。この改善に直結するのは選考であるという考えを念頭に、選考プロセスの設計を主導しました。そのため、広報方針などを検討し応募者のターゲット層の拡大を目指すところから始めました。また、運営局が求める人材と応募者が当事業に求める理想の乖離、つまり運営局と応募者間のミスマッチを最小限に留めることを重視して選考プロセスを実施しました。結果として、応募者のターゲット層拡大は困難であり一代では目に見える成果は得られませんでした。一方で、応募者層の分析、活動内容の説明の徹底、当事業の活動に必要な力を見ることができるような課題･採点基準作成に注力したことで、応募者･運営局間でのミスマッチは減少したと考えます。

加えて、本年度は、台風 19 号の接近により応募者全員が一同に会して行う会議型のコンテンツが中止となるというトラブルが発生しました。しかし大きな問題なく派遣団員の選出が実現しました。このことから、会議型コンテンツ実施の是非を含む選考課題のタスク量の調整に関しては今後も検討の余地があるものと考えられます。

以上で選考プロセス担当の報告といたします。次代派遣団員を選出するという他者の人生を左右するような重責と向き合うことが出来たのは貴重な経験でした。

団員育成プログラム(DDP)

東京大学法学部
第 1 類 3 年
駒場研究会

水田光

1. 役職概要

当事業の理念である「国際社会において活躍する人材を育成すること」を念頭に置き、3 月末に開催される模擬国連全米大会(NMUN: National Model United Nations)で成果を残すことができるようにするための能力を育成するべく、コンテンツを企画･実施します。

2. 実行事項

2019 年 11 月から 2020 年 3 月にかけて、全体で集まり行う全体 DDP を関東において 3 回、オンラインで 1 回の計 4 回、関東･関西に分かれての地域 DDP を 3 回実施しました。これらの DDP においては、交渉能力や英語能力、論理的思考力を特に強く意識したコンテンツを実施しました。さらに、昨年度 NMUN に参加したことにより運営局員が獲得した知識やノウハウを引き継ぐべく、個人 DDP というメンターシップ制度を実施しました。また、2 月 9 日には政策発表会を開催しました。派遣団員が NMUN に向けて練り上げた政策を、国際関係等学術分野の専門家の方に発表しました。そして、いただいたコメントをもとに政策にさらなる磨きをかけました。

3. 振り返り

本年度の DDP はテーマを「きっかけ」としました。人が集まって共に何かの作業をする時間は限られています。DDP という時間において具体的な知識のインプットをすることはもちろん大事です。しかし DDP でない日常の中に転がっている学びの機会を発見し活用すること、DDP 外での学びの営みそれ自体をより密度の濃いものにすることも同様に大事だと考えました。本年度の DDP では、異なる国際問題についての見識を深め、当事業以外の場所で異なる能力を伸ばしている多様な派遣団員･運営局員間での様々な形態での交流を促しました。異なる国際問題でも似たようなアプローチが行われていることの発見、他分野での学びが別の場所でも活用できる普遍性を持ったものであることの発見は、今後の学びをより豊かなものにする「きっかけ」となっていたと思います。

交流や双方向性を重視する学びの形態は参加者の質に学びの質が影響される側面が大きく、一般的な知識を伝達しインプットしてもらう方が目に見える成果が上がりやすいという性質が一般に認められると思います。確実な成果を取るべきか葛藤する時期もありましたが、主体的に学び、知的研鑽を積む派遣団員の姿を見て、自分が定めた「きっかけ」という方針は団員の成長に資するものであったと感じております。

今年の挑戦で得られたノウハウを、次代に引き継いでいきたいと思います。

英語団員育成プログラム(英語 DDP)

国際基督教大学教養学部
アーツ･サイエンス学科 3 年
国立研究会

向後大翔

1.　役職概要

英語団員育成プログラム(英語 DDP)担当は、今年度より当事業運営局内に新たに設置された役職です。当事業が毎年実施している DDP のうち、英語力向上に主眼をおいたコンテンツを企画･実施し、また、希望者を対象に個人英語 DDP を実施します。さらに、運営局員･派遣団員に対する英語面でのサポートを行います。

2.　実行事項

DDP における英語コンテンツとしては、グループディスカッションやディベート、即興プレゼンテーションなど、派遣団員が全米大会(NMUN: National Model United Nations)に参加するにあたり必要な英語での会話スキルを向上することに重点をおいたものを企画･実施しました。

希望者を対象とした個人英語 DDP は、毎週 1 回約 1 時間程度、Skype を利用して行いました。シャドーイングや General Conversation などの英語の基礎を磨くコンテンツからはじまり、ニュース記事を読んだ上でのグループディスカッションなどの他、NMUN に向け、実際の会議を想定し、スピーチや交渉の練習機会を設けました。

3.　振り返り

英語 DDP 担当は今年度新設された役職であるため、その業務は常に試行錯誤のくり返しでした。特に、英語について「教える」ということは、これまで英語を学ぶことの方が多かった私にとっては荷が重いと感じることもありました。そこで、英語を「教える」のではなく、英語を「ともに学ぶ」という姿勢で各種コンテンツの企画･実施にあたることにしました。派遣団員と同じ目線に立つことで彼らが楽しく英語とふれあい、英語力を向上させることができるのかを考えることができました。

DDP 終了後に派遣団員に対して行ったアンケートでは、比較的高い評価を得ることができました。英語 DDP のみが要因ではないと思われますが、国際コミュニケーション英語能力テスト(TOEIC: Test of English for International Communication)のスコアが 1 年前と比べて向上した派遣団員も複数名おり、英語 DDP 担当としては大変嬉しく感じております。このように、今年度の英語 DDP は一定程度の成果を残すことができたのではないかと思います。改善点を含めたアンケート結果を踏まえ、次代に引き継ぎを行うことで、来年度以降、英語 DDP の拡充を推し進めることができると考えております。また、私自身も初代英語 DDP 担当として英語 DDP の行く末を見守りながら、少しでも英語 DDP の発展に寄与できればと思います。

OBOG

青山学院大学経営学部
マーケティング学科 3 年
日吉研究会

中村紫英理

1.　役職概要

現役で活動を行なっている派遣団員･運営局員と、既に活動期間を終えた OBOG の皆様を繋ぐ任務を担っている役職です。

主な業務の内容は、例年実施されている OBOG 会の幹事です。事前準備として、会場の予約と設営、当日の業務として司会を担います。

その他の業務としては OBOG の名簿の管理やメーリングリストでの当事業のイベントの告知を行います。

2.　実行事項

本年度実施しました業務は OBOG 会の企画･実施と OBOG のメーリングリストのアップデートです。

昨年度の運営局員から引き継ぎ、初めての大きな仕事が OBOG 会でした。新宿や渋谷からのアクセスがよく、大人数が集まれる会場を探し、お店の方と相談を重ねた上で予約をしました。事前に OBOG 会の開催日時や場所などの詳細をメールでお知らせし、質問にも対応しました。当日は、運営局員の助けも借りながら、司会進行を務め、無事に第 37 代派遣団員の紹介と前年度の渡米報告をすることができました。OBOG 会の最中は、現役の派遣団員･運営局員そして OBOG の方々が和気藹々と話している様子を見て大変嬉しかったです。

メーリングリストは、現役の派遣団員･運営局員と OBOG の方々を結ぶ大事なものです。OBOG の方々との関係を絶やさないよう、個人情報が変更になった方々の新しい情報を集めさせていただきました。

3.　振り返り

OBOG 会の会場に適している場所を選ぶのにはいくつか条件があります。しかし、初めての大仕事でそれを見極め、予約することは難しかったです。適している条件を書き出し、わかりやすい状態で次代の担当者に引き継ぎます。

また、OBOG 会の内容も、第 37 代派遣団員の紹介と前年度の渡米報告というあっさりしたものになってしまいました。

現役の派遣団員と運営局員そして OBOG の皆様がより親睦が深められるようなコンテンツは何かを追求し、実施できたらよかったと思います。

これから、次代の担当者に業務を引き継ぐことになりますが、私の反省を活かし、後輩がより仕事をしやすくする環境を作るのが私の最後の仕事だと思っています。反省点を見つめ直し、しっかり引き継ぎを行います。

この業務を遂行できたのは OBOG の皆様のご支援のお陰です。この場を借りてお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。これからも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

9. 会計報告

2020 年模擬国連会議全米大会第 37 代日本代表団派遣事業決算報告書

2020 年模擬国連会議全米大会第 37 代日本代表団派遣事業決算

(2019 年 6 月 1 日~2020 年 5 月 31 日)

収入(単位: 円)		支出(単位: 円)	
事業収入		**第37代代表団派遣費**	
第37代派遣団員 自己負担金	260,130	渡米プログラム キャンセル費用	191,644
選考プロセス参加費用	39,322	全米大会参加費用[5]	796,045
助成金		**広報物作成費**	
公営財団法人　三菱UFJ国際財団	500,000	事業報告書	24,755
公益財団法人　平和中島財団	400,000	チラシ	3,250
公益財団法人　双日国際交流財団	300,000	HP更新等	14,253
寄付		**国内交通費[6]**	240,000
日本模擬国連	205,000		
		事務費	47,717
前年度繰越金	27,119		
		次年度繰越金	
		第38代代表団派遣費用として[7]	309,952
		第37代代表団渡米代替プログラム実施費用として[8]	103,955
合計	1,731,571	合計	1,731,571

[5] 一部手数料等を除き、次年度大会への繰越が可能なため、繰越いたしました。
[6] DDP 実施時等の派遣団員･運営局員の関東･関西間での交通費です。
[7] 公益財団法人　双日国際交流財団様より賜った助成金を含みます。
[8] 公益財団法人　三菱 UFJ 国際財団様および公益財団法人　平和中島財団様より賜った助成金(合計: 900,000 円)から、「全米大会参加費用」を差し引いた金額です。

10. 支援団体･個人一覧

「模擬国連会議全米大会第 37 代日本代表団派遣事業」に対し、多くの財団、企業、その他の団体、個人様からのご支援、ご協力を頂きました。ここに厚く御礼申しあげますとともに、謹んでご芳名を掲載いたします。

(以下五十音順、敬称略)

【助成】

公益財団法人　関西･大阪 21 世紀協会

EXPO'70 FUND
（公財）関西･大阪21世紀協会

公益財団法人　双日国際交流財団

公益財団法人　平和中島財団

公益財団法人　三菱 UFJ 国際財団

【後援】

外務省

国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所

国連工業開発機関(UNIDO)東京投資･技術移転促進事務所

国連広報センター

在日本アメリカ大使館(渡米プログラムのみ)

文部科学省

【協力】

株式会社　ジェイティービー

【顧問】

秋月弘子	石原直紀	敦賀和外
浅田正彦	位田隆一	星野俊也
荒島千鶴	大芝亮	吉川元偉

2020 年模擬国連会議全米大会
第 37 代日本代表団派遣事業報告書

2020 年 5 月吉日
編集: 日山実乃里
監修: 坂本知陽
発行: 日本模擬国連
発行責任者: 2020 年模擬国連会議全米大会第 37 代日本代表団派遣事業運営局
報告書担当 日山実乃里